

日韓宮殿の設計思想について

内田 和伸

- I. はじめに
- II. 塼積擁壁の設計方法
- III. 宮殿の設計思想
- IV. 朝鮮半島における宮殿の設計思想
- V. 平城宮第一次大極殿院の設計思想
- VI. 大極殿院と陰陽寮
- VII. おわりに

要 旨 平城宮第一次大極殿院は平城宮の中心部に位置し、即位式や元日の朝賀などが行われたところである。大極殿を長大な回廊が取り囲んでおり、その北 1/3 は約 2.4m の高台で、南 2/3 は磔敷きの広場である。高台には大極殿・後殿が位置し、広場から高台に登る斜路が東西にあり、高台の正面と斜路の側面には 70 度の角度で塼（瓦質の煉瓦）が積まれている。この部分を塼積擁壁と呼んでいる。その形と各部の長さは不可解なものであったが、設計方法を検討した結果、大極殿中心のやや北寄りに中心をもつ同心 3 円と、後殿前に中心をもつ 1 偏心円の交点などを用いて設計・施工していることがわかった。この同心 3 円と 1 偏心円はキトラ古墳の天文図のような宇宙の構造を意図している。始皇帝以来、宮殿は宇宙を象るものであり、『文選』などにその設計思想を窺うことができる。古代日本もそれを学び、新羅もおそらく同様であって、現存する景福宮にも受け継がれる。大極殿院での遺構・遺物の解釈の試みを、今後さらに進展する韓国で遺構・遺物の解釈に比較検討の材料として提示できれば幸いである。

キーワード 平城宮 大極殿 第一次大極殿院 塼積擁壁 景福宮 設計思想

I. はじめに

大極殿は即位式や元日の朝賀、外国使節との謁見など国家的な儀礼を行うときに天皇が出御した、最も重要な建物である。宮城の中心部に位置する最大の建物で、それを回廊で取り囲む区画を大極殿院と呼んでいる。礎石に柱が建つ中国風の建築様式をもつ大極殿院は藤原宮ではじめて造られ、桓武天皇の長岡宮まで続く。桓武天皇の平安宮では南門や南面回廊がなくなり、南にある朝堂院という区画と一体となる。

奈良時代前半の平城宮第一次大極殿院は朱雀門の北に位置し、東西約177.0m、南北約317.6mであり、古代宮城の大極殿院の中で最も大きな規模を持つ¹⁾。当時の1尺は0.295m前後で、土地の測量に用いた大尺はこの1.2倍であって、東西500大尺(600尺)、南北900大尺(1080尺)²⁾となる。その南寄り3分の2が広場で、北寄り3分の1が大極殿と後殿の建つ約2.4mの高台となる。南門から600大尺の位置にある高台と、広場側から高台へ登る東西2つの斜路が大きな特徴である(第1・3・4図)。その高台前面および斜路側面の屈曲する擁壁は長方形の塼(瓦質の煉瓦)を約70度の勾配で積んで化粧しており、この部分を塼積擁壁(第8～13図)、特に正面の直線部を塼積壇と呼ぶ(第5・6図)。塼積壇中央には掘立柱の木階と考えられる遺構がある(第7図)。各直線部の長さは小尺でも大尺でも完数値は得られず、なす角度も不可解で、その平面形は複雑な様相を呈する(第2図)。

ここでは、塼積擁壁の設計方法を手掛かりに、その背景にある宮殿造営における設計思想を整理する。次に、近代になって再建された景福宮までの朝鮮半島における宮殿の設計思想を探る。さらに、平城宮第一次大極殿院の施設配置や出土遺物を検討し、8世紀の日本における宮殿の造営思想の復元考察を試みる。これは今後明らかになるであろう同時代の新羅王宮等の遺構・遺物の検討に僅かながらも比較検討の材料を提供できるのではないかと思うからである。

II. 塼積擁壁の設計方法

1. 基点からの計測と設計方法

塼積擁壁の設計方法の検討のために関連遺構の位置と記号を示した(第1表・第14図)。塼積擁壁の遺構位置の計測はその最下段前面とし、未検出の屈曲点(W3)は、それを挟む二直線の延長部交点とした。塼積擁壁の対称部の長さを比べると2尺を越える差があり、重要な儀礼の場所としては施工実態が粗雑に見える。これは各部分の左右対称を重視した設計図とそれに基づく施工が行われなかったことを窺わせる。すなわち、E1あるいはW1の塼積壇両端等から各部分の長さや方向を測り施工したのではなく、やや離れた基準となる点から各点までの距離を測って位置を定め、その点同士を結んだ結果、対称部に2尺程の差を

生じたと考える方が自然である。こうして想定される基準となる点（以下、基点）は、東西で対になる屈曲する各2辺の延長部の交点や、大極殿や後殿の中心、中軸線上で地割の基準となる点、あるいはそれらの付近に想定される近似点である。

第2表に各基点から測った塼積擁壁各点間の距離、それを0.295で除した尺長、0.354で除した大尺での尺長をそれぞれ記した。対称部の長さの差を参考に、以下の検討では許容施工誤差を2.0尺あるいは1.7大尺までとした上で、その尺長が10尺あるいは10大尺の倍数で許容施工誤差内に収まる場合に下線を付した。対称部の長さも同様であった場合は計画値としての可能性があると解し、その数値を次列に記した。さらに、その数値が小尺なら40尺の、大尺なら30大尺の何倍であるかを最後に記した。なお、E4は削平が著しく、E4と各基点との距離については短くなることが明らかなためW4と各基点との尺長のみが完数値を得ていれば計画値の可能性のあるものとした。検討の結果、擁壁各点を定める二つの設計案を考え得た。

設計案A（第15図）

- 手順1：大極殿心DCから半径200尺（40尺×5）の円を描き、南門心から600大尺の東西基準線との交点をE1・W1とする。
- 手順2：高台側中軸線上、E1とW1から240大尺（30大尺×8）の距離の点Ⅱ'を求め、Ⅱ'から270大尺（30大尺×9）で円を描く。一方、中軸線上南から700大尺の点⑦からは240尺（40尺×6）で円を描き、それら2円の交点をE2・W2とする。
- 手順3：同様にⅡ'から300大尺（30大尺×10）、⑦から280尺（40尺×7）の円を描き、2円の交点をE3・W3とする。
- 手順4：⑦から320尺（40尺×8）の円と、E3・W3を通る南北線との交点をE4・W4とする。

設計案B（第16図）

- 手順1：大極殿心DCから半径200尺（40尺×5）の円を描き、南門心から600大尺の東西基準線との交点をE1・W1とする。
- 手順2：大極殿心の北120尺（40尺×3）にⅡ"を設ける。
- 手順3：Ⅱ"とE1・W1を結ぶ南延長と、⑦から240尺（40尺×6）の円の交点をE2・W2とする。
- 手順4：Ⅱ"から300大尺（30大尺×10）〔360尺（40尺×9）〕、⑦から280尺（40尺×7）の円を描き、2円の交点をE3・W3とする。
- 手順5：⑦から320尺（40尺×8）の円と、E3・W3を通る南北線との交点をE4・W4とする。

以上の2案は、複雑な設計手法を踏みながらも規則性が窺える。このいずれかを用いて塼

積擁壁を設計・施工したものと考えることができる。

2. 大極殿院における大極殿の位置

第一次大極殿院の場合、いずれの設計方法にしても中軸線と南門心から700大尺の基準線との交点⑦が同心3円の中心である。ところが、この点は大極殿の建物中心（DC）の約8尺北に位置する（第1図）。藤原宮大極殿院、奈良時代半ばの難波宮大極殿院、奈良時代後半の平城宮第二次大極殿院でも大極殿院における大極殿の位置をみると、東西方向の基準線（その位置は順に中軸線を南から1対1、2対1、2対1に内分）は大極殿中心ではなく、そのやや北側を通る（第17～19図）³。一方、桓武天皇の長岡宮では南から1対1に内分する点は大極殿中心の南側を通る（第20図）。いずれにしても大極殿の中心は大極殿院の中では半端な位置にあるのである。こうした区画施設内における大極殿の配置は、他の大区画の中での中心建物の配置原理とは異なることが指摘できる。たとえば、平城宮第一次大極殿院の東側に位置し、第二次大極殿の下層で検出された大安殿と目される⁴建物遺構の中心は、建物を囲む区画の中軸線を南から2対1に内分する点に一致させているのである⁵（第21図）。

大極殿院における大極殿の配置と大極殿内の柱配置との関係のみてみよう。大極殿は桁行7間・梁行2間の身舎に四面廂が取り付け、全体で桁行9間・梁行4間の規模である。大極殿の柱位置と回廊の位置が想定できる平城宮の第一次大極殿⁶と明らかになっている第二次大極殿で検討すると、大極殿の南廂を除いた北3間分の中心（T）が東西の基準線にほぼ一致することがわかった（第22図）。すなわちTは、前者では南門心から700大尺の位置に、後者では大極殿院の南北中軸線を南門心から2対1に内分する点に一致させるのである。大極殿の南廂を除いた部分の中心を東西の基準線に一致するように大極殿を配置しているため、大極殿院の中で大極殿の配置が変則的な位置にあるようにみえたのである。大極殿の南廂が配置計画の上で異質なものは、そこが唐招提寺金堂のように吹き放ちで、室内ではなかったからではないかと思われる。ソウルの孔廟の大成殿（第23図）のように、儒教建築で正面1間のみ吹き放ちとなっているものが見られることとも関係すると思われる。

『国史大辞典』に高御座たかみくらを見ると、大極殿内部の中央に置かれるとされ、それが一般的な理解となっているようである。しかしながら、多くの仏殿の須弥壇や中国・韓国に現存する宮殿の玉座が建物中心よりやや奥にあり、京都御所内の現高御座（第24図）も紫宸殿中心よりやや奥にあるように、大極殿のやや奥まった位置にあるこの点こそ、天皇の玉座である高御座の中心である。第一次大極殿院では大極殿内の北寄りに高御座の位置を定め、これを南から700大尺になるように大極殿を配置した。そして、高御座心が塙積擁壁の設計に関わる等差の同心3円の中心なのである。

3. 設計方法の解釈

等差の同心3円に1偏心円が交差する設計案Bの構造は、7世紀終わりから8世紀初めに

造られたと考えられているキトラ古墳の石室天井に描かれた天文図（第25図）を連想させる。この天文図は、天の北極を中心に内規（周極星の範囲）・天の赤道・外規（観測地点における南天の限界）が同心3円として、黄道が天の赤道と同規模の偏心円としてそれぞれ描かれ、金箔の丸点で星が、それらを朱線で結んで星座が表わされたものである。大極殿の「大極」とは易の思想でいう「太極」のことで、万物宇宙の根元である。その太極は、天文占星思想では天帝（太一または天皇大帝）の住む北極星周辺の星座である。高御座心（T=⑦）と約8尺ずれる大極殿心（DC）の関係は、天の北極とこれとわずかにずれる北極星であり、同心3円（40尺×6、7、8）は内規・赤道・外規、偏心円（40尺×9）は黄道に対応するであろう。大極殿前庭東寄りに位置する井戸SE7145（第3図）は偏心円上に位置することから、黄道二十八宿の星座「東井」を思わせる。塙積擁壁は設計案Bを用いて設計・施工され、物的な宇宙の構造を具象的に象るのではなかろうか。なお、天の北極は歳差により1300年の間に位置を変えているが、北極星と天の北極が離れていたことには変わりはない。

Ⅲ. 宮殿の設計思想

1. 古代中国における宮殿の設計思想

始皇帝以来、宮殿は宇宙を象るものであった。『史記』によると、始皇帝はその二十七年（B.C.220）、渭水の南に長信宮を造営し、ついで名を極廟と改め、天の中宮を象った。また、三十五年（B.C.212）には阿房宮から渭水を渡る復道を造り、これを咸陽に連結した。これは天極星（天の紫宮にある十七の星）が、閣道によって天の川を横切り、宮室星に至る形を象ったとする。一方、始皇帝陵（地下宮殿）は「上は天文を具え、下は地理を具う」と記され、地下宮殿の天井に天文が描かれていたことも知られる。もっとも、宇宙を象るのは宮殿・陵墓だけではなく、都城・陵墓・庭園・馬車⁷・鏡・祭祀・舞踊なども同様であった。例えば、漢代の禁苑である上林苑の昆明池でも、池を天の川に見立てて牽牛・織女の石像物が兩岸に立てられている。ここでは宮殿に絞って論を進めることとしよう。

ところで、推古天皇十二年（604）制定の『十七条憲法』や『日本書紀』、『万葉集』など我が国の史書文学に多大な影響を及ぼしたとされるものに『文選』がある。『文選』は周代から南朝梁代までの約千年間にわたる文章・詩・論文などを、梁の昭明太子が編纂したものである。遅くとも奈良時代半ばには下級官人がこれを利用し、教養を培っていたことが平城宮跡や秋田城跡出土木簡によって知られる。その『文選』には、以下のように宮殿の設計思想が明確に記される部分がある。（ ）内には通釈を記した。

①『文選』班孟堅作「西都賦」⁸

「大漢命を受けて之に都するに至るに及びて、仰いで東井の精を悟り、俯して河圖の靈に協ふ。（大漢が天命を受けここに都を定めるに当たって、天を仰げば、雍州の分野を司る東井の星座が、

ここを都とせよと示すを悟り、地を見れば、黄河より現れ出た河図の靈妙なしるしにも、ここを都とする希望にうまく合う。)」（中略）「其の宮室は、天地に體象^{かたど}り、陰陽を經緯し、坤靈の正位に據り、太紫の圓方に放ふ。中天の華闕を樹て、冠山の朱堂を豊かにし、(その宮室は、天と地の形に象り、陰陽の法に合わせて、南北、東西の方向を定め、坤^{せいなん}の地勢の中正な位置を足場として、祭政一致の政事をする明堂を造営し、星座太微の円形と星座紫宮の方形どおりに作り上げる。天に中する壮麗な未央宮の宮門“東闕”と“北闕”とをうち建て、山上の冠のごとく朱塗りの殿堂を壮麗に構築する。)」

漢が天命を受け、都を造営し、その宮殿は宇宙を象ることを述べるのである。漢長安城の未央宮を取り巻く他の宮殿に関しては次のように謳う。

「徇^{めぐ}らずに離宮別寝を以てし、承^{うく}るに崇臺^{しゅうだい}閭館^{かんくわん}を以てす。煥^{くわん}として列宿の紫宮を是れ環るが若く、(この未央宮のそばに、離宮・別殿が輪になってめぐり、それに接するように高台やがらんとした大きな館が建っている。あたかももろもろの居並ぶ星座や紫微宮の星座が天帝の紫宮のまわりをめぐるのがごとく、照りかがやいている。）」(中略)「周^{めぐら}すに鉤陳^{こうちん}の位を以てし、衛^{まもる}るに嚴更^{げんかう}の署を以てし、(星座鉤陳の六つの星が紫微宮を守る位置にあるように、未央宮の周囲には、夜警の官署を置いて護衛する。)」

このように、宮殿は北極星付近の星座紫微宮であり、その配置はまさに星空を擬えていたのである。

②『文選』張平子作「西京賦」⁹

「紫宮を未央に正し、嶢闕^{げうけつ}を閭闔^{しやうかふ}に表し、龍首を疏^{かた}して以て殿を抗^{かた}げ、狀巍峩^{かたかくわいが}として以て岌嶮^{かた}たり(星座紫微宮に象り、未央宮の位置を正しく定め、高樓の門構を、紫微宮の天門、閭闔に象って、宮殿の目標とし、龍首の山を切り開いて、その正殿を高々と造る)」。ここでも未央宮が紫微宮を象ったとしている。

③『文選』王文考作「魯靈光殿賦」¹⁰

「魯靈光殿賦」の序によると、魯の靈光殿は前漢武帝の皇子が建てたもので、長安の未央宮も建章宮も破壊されたが、靈光殿は無事であった。これは神々が漢王朝を存続させようと守ったのではないかとある。また、「然れども其の規矩制度、上は星宿に應ずるは、亦永く安らかなる所以なり(この宮殿の設計自体が天の星座の定める建築の理に叶っていたことも永く安泰いられた理由なのだろう。)」とする。本文中、靈光殿内部の意匠を詳細に見て讚えた部分でも、「規矩天に應じ、上は穹廡^{しそう}に憲^{のつと}る(その設計は、天理に則り、穹廡の星座(二十八宿の室宿と壁宿)にならっている)」としている。

“宮殿は宇宙を象る”という設計思想は漢代以降も引き継がれる。東魏・北齊の鄴都南城にはじめて星座名を冠する文昌殿という殿舎が建てられ、後に明帝がはじめて太極殿を造営した¹¹。また、『水経注』卷一六穀水注¹²に、魏の明帝が洛陽城南宮で漢の崇徳殿跡に「上天の太極に法って」太極殿を建設した。さらに、梁の太極殿に関しては『徐孝穆集』卷

八「太極殿銘序」に「星象に法って王位の尊嚴を増し」「日月星辰と輝きを等しくして宇宙に顯示し、万国の諸侯を朝会せしめる」とある¹³。その名、太極殿は唐の長安城太極宮の正殿へも引き継がれ、“太”と“大”が通用されて¹⁴、同時代の飛鳥浄御原宮や藤原宮、平城宮等へと影響を及ぼすことになる。

奈良時代の知識人たちが学んだ『文選』が宮殿に関する事実をどこまで伝えているか、文学的強調を差し引いて考える必要はある。しかし、そこには“宮殿は宇宙を象る”という設計思想が実際に記されているのである。平城宮第一次大極殿院の塼積擁壁の平面プランは高御座を中心にした同心3円と、その北側に中心を持つ偏心円の交点を使い設計施工されていることをみだが、“宮殿は宇宙を象る”ものであるため、設計案Bを用いて物的な宇宙の構造を具象的に象るものであったといえる。詩文からすると、これは天理に叶ったことであり、宮殿が永く安泰であるために必要だったのである。宮殿を宇宙に擬える考えは、確実に古代日本の宮殿の設計思想に取り入れられたものと指摘できよう。古代日本の都城が宇宙を象るということについては、瀧川政次郎¹⁵が指摘した研究が早い例であるが、管見の限り、以後は実証的な研究はされてこなかった。

宮殿の造営では建物名が星や星座の名称であったり、建物配置が星座を象ったり、施設の平面形が宇宙の構造を模したりし、具象的に宇宙を象る方法が行われた。明清時代の宮城である紫禁城（北京の故宮博物院）はその名が天の北極近くの紫微星に因み、宮城内太和門前には天の川を象って蛇行する金水河¹⁶が流れるのである（第26図）。京都御所の正殿紫宸殿も紫微星に因むものであり、その設計思想は忘れられようとしているが、確かに遺例が現存するのである。

2. 天命思想と天道思想

ではなぜ、宮殿は宇宙を象るのであろうか。宮殿造営の背景には、天命思想¹⁷と天道思想という「天の思想」が関わっている。

天命思想確立に大きな役割を果たしたのが前漢の武帝に徴用された儒者董仲舒であった。彼は君主権の強化によって専制国家体制の樹立に尽力すると同時に、権力の強大化が秦の始皇帝のような専制君主の横暴を招き、王朝を滅亡させることのないようにするため、儒教に陰陽五行説と天人相関思想を結合させた。儒教は基本的には合理的な世界観をもっていたが、国の統一原理となるには不十分で、為政者を神聖化するための脚色が必要であった。古代中国では、地上の本来の統治者は宇宙の統治者である昊天上帝すなわち天帝と考えられた。しかし、人でない天帝が実際に地上を統治することはできないため、天帝は地上の統括と人民の化育を行う然るべき有徳者に天命を下し、受命した者が天子となる。天子が徳をもって地上を統治し（徳治）、仁政を行い、それが天帝の意志にかなえば甘露が降ったり、めでたい動植物が出現したりし、地上にめでたい徴、祥瑞をもたらす。一方、天

子が徳に欠け、苛政を行い、天帝の意志にかなわなければ、天帝は天子の不徳を責める咎徴として日食、月食、火星の逆行などの天文の異変や、地震・干魃・水害・イナゴの大発生などの災害をもたらすとされた。自然と人事は感應するという考え（天人相関・感）があったため災害異変が起きると為政者である天子は自身の不徳を恥じたのであった。

また、宇宙の森羅万象は陰陽二気とそこから派生する五行から生じ、陰陽二気が調和を失っても災害が起きると考えられた。この陰陽二気の調和不調和も為政者の徳不徳に反応するという帝王観を内包したのである。このため天子の不徳がさらに進めば天帝は天命を革め（革命）、他姓の者が天子となって（姓を易えて）王朝が交替する（易姓革命）。干支の上では甲子の年は革命の年、戊辰は革運、辛酉は革命と言われ、革命の起きる年であった¹⁷。日本では天武系の皇統から天智系の皇統への王朝の交替を意識した桓武天皇の長岡遷都も甲子革命にあたる。これが天命思想である。

天子は、天帝から委託を受けた証に天帝の常居である北極星の位置に宮殿を営み、天境界を地上の宮殿の中に再現した。これによって自身を権威づけ、南面して政治を総攬し、天道に基づいた施政を行うのであった。天道とは天に象り、天に則して行うべき帝王の道である。

3. 古代建築の設計方法と事例

宮殿の重要な建築については、天道に基づく方法として陰陽五行思想と密接な「月令図式の宇宙論」（第27図）と呼ばれる設計理論が重要視され、建築単体でも宇宙を象るのであった¹⁸。『淮南子』では時間のことを宙、空間のことを宇といったように、ここでいう宇宙とは時空のことである。

まず、陰陽五行思想とは、陰陽説と五行説が合わさり、易の思想の中核をなすものである。大極殿の名は『易』の太極に由来し、太極は陰陽の分かれていない混沌とした状況（これは『日本書紀』の冒頭にも記される）、宇宙の根元のことである。世界の事物は、陰と陽の二つの気と、その陰陽の交感より生まれた木火土金水の五元素によってつくられるとされる。陰陽説はすべてのものを陰陽の二元論で捉えるが、陰陽は同根のものとして、交感・交合・循環するとみるのである。陽には天・男・左・剛・春・東・太陽（日）・奇数・仁・徳、陰には地・女・右・柔・秋・西・太陰（月）・偶数・義・刑¹⁹などがある。五行は万物を構成する木火土金水五つの要素とその動きのことをいい、時間（季節）と空間（方位）、色、数なども五行に配当された。易はこれらを組み込んで変化する現象を数に変換して思考し、宇宙の秩序法則を理論付けた。その原理を用いて予測するのが易の占いである。儒教教典『易』は象（現象のパターン）と数とが宇宙を構成するとして、その原理を説いた。そして、『漢書』「律曆志」に「天の終数の九と地の終数十を併せて十九となり、易は窮まり終われば変化する。故にこれを閏法とする」とあるように、易と曆は切り離せないものであった。

「律曆志」には度量衡相互の関係がまとめられ、その関係を規定する数値は九・六・八であり、天・地・人（三才）という宇宙の秩序から説き起こされた²⁰。中国の伝統文化では数は哲学的な意味をもっていたのである。『周髀算經』という数学書は鉤股弦の定理の証明から始めて宇宙観測の前段とし、その上で、天地の運動を論じ、日月食・月齢を推算、陰陽五行説に言及、すなわち、天道の理を地上の曆・陰陽五行で解釈して、儒教的論理で宇宙論を説く。すべての宇宙現象を数字で説明するを象数学といい、算術は曆法を媒介にして天の意志を知ることができることとされた²¹。このように易・曆・天文・数学は密接に関わっていたのである。天人相関理論に基づいて天意として現れる現象を解読する知識体系と未来を予知する技術、それらを用いた治世術を術数という²²。天下を治める為政者は、天命を受けた証に宇宙を象る宮殿を造営し、個々の建築物では治世のため天道に基づき、術数を駆使する必要があったのである。

さて、月令とは古代中国において一年十二ヶ月の星座、気候、行事、為政者の行いなどを記したもので、儒教教典『礼記』にある。この世の森羅万象は季節・方位に基づいて循環・調和・変化し、時間と空間は連携した有機体を構成していると考えられていた。その考えに基づき、「月令図式の宇宙論」では、建物が時空と調和するように計画するのである。具体的には、対になる東西の門では日華門と月華門（唐長安城宮城）、日精橋と月精橋（慶州）、迎春門と千秋門（京都御所）などと名付けた。建築単体では柱の数を四季や四方、十二支、黄道二十八宿などに因み、数字を介して、時空という意味の象徴的な宇宙を象るのである。

梁の建康宮の太極殿については晋代に1年の12箇月を象徴し12間で建造されたものであったが、梁の武帝の天監十二年（513）二月、この旧材を用いて明堂を建造し、太極殿は閏月をも象徴した13間に改められた²³。

唐の高宗の時、明堂に関する学説の対立があり建設には至らなかったが、その平面形や規模、柱などの数の意味が『旧唐書』卷二十二志第二礼儀二²⁴に数多く記される。一部を列挙しよう。「基八面、象八方」「又按周易、三為陽数、八為陰数。三八相乘、得二百四十尺。又按漢書、九會之数四十、合為二百八十、所以基径二百八十尺。故以交通天地之和、錯綜陰陽之数」「四柱以象四星。天有二十八宿、故二十八柱」「堂面九間、各廣一丈九尺。按尚書、地有九州、故立九間。又按周易、陰数十、故間別一丈九尺、所以規模厚地、準則陰陽、法二氣以通基、置九州於一字」「四柱以象四星。有八節、八政、八風、八音、四八三十二柱。」「下柳、七十二枚。按易緯、有七十二候、故置七十二枚。」「下層四象時、各隨方色。中層法十二辰、圓蓋、蓋上盤九龍捧之。上層法二十四氣、亦圓蓋。」「結構準陰陽之数」。いずれの数字も易や陰陽、時空などに関わるものを用いていることが確認でき、塼積擁壁の平面・断面の設計施工に用いられた尺長が見えることも注目すべきである。

高宗の皇后であった則天武后は東都洛陽宮の中心建物、乾元殿を毀し、垂拱四年（688）

その跡に古来、王者の徳治の象徴と考えられ、政教を明らかにするという明堂を完成させた。三層で高さ294尺、東西300尺という規模を誇り、下層は方角の色を塗り、中層は円屋根で、屋根の上に九龍の献げる盤が置かれ、上層もまた円屋根だった。万象神宮と名付け、載初元年（690）には国号を周と改めた。明堂では群臣を饗して「上は巖配の所、下は布政の居」という明堂の理念を顕現した。証聖元年（695）正月に近接する天堂から失火、明堂も類焼したが、武后は再建に着手し天册万歳二年（696）には完成させ、通天宮と命名、万歳通天と改元した²⁵。「旧唐書」則天武后紀に、万歳登封二年（697）四月、明堂の前庭での儀式に九鼎の鑄造が据えられたとあり、『資治通鑑』の唐紀二十一では、この二年前に九鼎と十二神像が鑄造されていたことが知られる。十二神（天）と大地を象徴する九鼎（地）によって天円地方の宇宙構造が表明され、天下全体の掌握を象徴したのである²⁶。なお、武后讓位後は中宗が明堂で即位、これが正殿の役割を果たした。

数字が宇宙を象るこうした事例を、現存する建築では北京の天壇にある祈念殿（第28図）、ソウルの景福宮慶会楼（第29図）、慶州の瞻星台^{せんせいだい}（第30図）等に見ることができる。祈念殿の外側の28本の柱は二十八宿、中間の12本の柱は十二支、内側の4本の龍井柱は四神を象るという²⁷。祈念殿東側にある長廊と呼ばれる72間の回廊は、一年の日数の概数360を5日ごとに細分した季節の七十二候を象るものと思われる。景福宮勤政殿の北西の池中に建つ慶会楼は桁行七間、梁間五間で柱は48本。内側から天地人の三才、易の八卦、十二ヶ月、二十四方位などを配当している²⁸。新羅時代の天文台の遺構である瞻星台は一年の日数を象った366の石材で構築されている。

以上のように中国・韓国・日本に現存する宮殿においても宇宙を象ることを確認できるのである。

IV. 朝鮮半島における宮殿の設計思想

1. 朝鮮王朝以前

朝鮮半島では、二世紀末の後漢の時代に楽浪郡をはじめとする四郡が置かれた。その後、三国時代の高句麗においては中国六朝時代の思想や文化が波及したことは、日月星辰や四神を描く平壤の高句麗の古墳群に明らかである。

米田美代治は、「天文学の発生的理論は、宇宙の生成の理論を基調として発展したのであるから、之を形の上で具体的な理論とするには、勢い数学と其の図形を以て解釈されたのである。故に数学と天文学は不可分な関係にあり、吾々が上代の建築を取り上げて表現形態や造営計画等を究明するに、其の表現形式や応用数学に天文占星的關係を見出され得るとも、敢えて不思議ではないであろう。」と述べ²⁹、古代朝鮮の建築が天文思想に関わることを指摘している。具体的には、仏教伝来初期の清岩里遺跡の建物配置では、八角堂を中

心に四方に建物が配置され、それらの北方に建物が三棟並ぶ配置が想定されているが、これを米田は『史記』天官書が述べる、黄道を付近に東宮、西宮、南宮、北宮、北方に中宮（陰徳、天一等の三星座）と解している。その他の寺院跡の建物配置についても同様の解釈がなされている。また、統一新羅時代の遺例として佛国寺と石窟庵をあげている。特にドーム型の天井をもつ石窟庵では、「先ず、窟開口と窟平面圓の半径の十二唐尺は一日十二刻に相当し、窟平面の圓周は黄道の三六五度即ち一年に相当し、同一圓周上に組まれたる半球面体の穹窿は悠久なる天体宇宙に相当し、偏見に過ぎるやもしれないが天井中央の蓮華文と穹窿間の嵌石は天空に懸る日月星辰に比定されるのである。」と指摘している。本人の補遺での修正もある通り、これらの指摘がすべて正鵠を得たものとは思わないが、建物単体としての石窟庵の設計寸法においては時空に関わる数字を用いていることは首肯できると思う。

現時点では宮殿の建物配置が星座の形を象るかを明らかにすることはできないが、星座に関わる名称をもつ建物として“紫宸殿”を『三国史記』に探すと、二ヶ所の記載を確認できる。しかしながら、いずれも中国皇帝の所在宮に関する記述である。一方、『三国遺事』「原宗興法 厭讎滅身」において、元和年間（唐の憲宗の年号で、806-820年）に南潤寺の沙門である一念が、むかし新羅の法興大王（在位514-540）が政事をとったことに関する記事の中に「昔法興大王垂拱紫極之殿。」と記している³⁰。紫極之殿は当然、紫微宮中の北極に因む名称であるが、記載が約三百年後のことである。その20~30年前、『三国史記』卷第十 新羅本紀第十の元聖王の四年（788）春条には「始めて読書三品科を定めて（官路に）出身できるようにした。春秋左氏伝とか礼記・文選を読んで文意に通じ、あわせて論語・孝経に明るい者を上品（上級）とし、曲礼・論語・孝経を読破した者を中品とし、曲礼・孝経を読破した者を下品とした。」³¹とある。『文選』が普及していたことが見えるので、正殿の名称が明らかでなくとも元和年間に紫極之殿と記すだけの知識が普及していたことは考えられる。もっとも、法興王の在位は514年から540年、中国の南朝では梁の武帝、北朝は北魏の孝明帝の時代である。梁の建康宮の正殿は太極殿であり、前述の通り天監十二年（513）二月、柱間12間の太極殿を13間に改めている。一方、北魏孝明帝の先々代孝文帝は太和十八年（494）に平城から洛陽へ遷都するが、その直前まで平城で建設事業を続けており、漢化政策の一環で太華殿を壊し太極殿を太和十六年（492）に建設し³²、その太極殿の名称は北魏洛陽城へも継承されていく。法興王の時代の正殿名称は天の北極に擬えたものであったと考えたいのではないだろうか。

2. 景福宮における建物配置

時代は降って李朝の宮殿をみよう。李成桂（太祖）は、1392年に松都（現在の開城）にあった高麗の王宮である寿昌宮で即位し、朝鮮王朝を建国、太祖三年（1394）に都を漢陽に定め、

景福宮を造営しはじめるが、現段階では創建当初の景福宮の規模と配置形式を正確に把握することは難しい。太祖の即位から二百年後の宣祖二十五年（1592）に、景福宮は秀吉の朝鮮出兵（壬辰倭乱）により全焼し、その後の270年以上は重建されなかった。高宗二年（1865）に、高宗の父である興宣大院君が重建に着手し、高宗五年（1868）には正宮を昌徳宮から景福宮に遷している。やや長くなるが、この時期の建物配置の特徴を『勤政殿実測調査報告書』³³から引用してみよう。

高宗代に重建された景福宮の配置計画上の特徴は《景福宮昌徳宮内上梁文》（国立中央図書館所蔵）によると、次のようないくつかの事実がわかる。

一つ、清国の戴東原の著書である《戴氏遺書考工記図》を参照した。

二つ、昌徳宮と慶熙宮の宮室制度を参照した。

三つ、配置の思想的原理として易象（太極・四象・八軌）を取っている。

四つ、夜空の星座の中で太微垣と紫微垣に各自所属されている帝王星座の配置を真似ている。

すなわち、中国伝統の‘三門三朝’の宮室制度をもとに、その時期の宮闕である昌徳宮と慶熙宮の建物及びその構成形式を参照したが、勤政殿を始め交泰殿までの中心一郭は太極図説あるいは天文図の星座配置を反映した事実が知られる。天文学は昔から帝王学であったが、宮廷芸術と密接な関連を持ってきた。それに天の北極星を中心に天体の全ての星が運行しているように、地つまり人間社会では王が中心であるという思考のため、王は常に北極星に比喻された。宮闕の正殿を紫極殿、紫宸殿などと命名したのもこの理由からである。それだけでなく中国をはじめとする東洋社会では星座の命名において宮闕をはじめとする社会組織を星座に投影した。結論的に言って、康寧殿一郭の5軒の建物は星座の五帝座に該当する。

また、太極図説とは性理学的宇宙観を図式的に要約して描いた図として陰と陽が分けられる前の原初的な混沌状態を太極といい、これが陰と陽で分けられ全ての事物の構造を形成するようになるという思想を描いた図である。これを景福宮配置に適用してみよう。まず、交泰殿は王妃の寝殿として王と王妃がここで居処しながら息子を得ると、彼が王世子の地位を経て至極な存在である王位にあがるため‘交泰：太極’と命名したのである。交泰殿の正門も陰陽を意味する‘両儀’と命名したが、この門の外から宇宙すなわち世界が開くことを意味する。両儀門の外には王の寝殿である康寧殿をはじめ5軒の建物が配置され、宇宙萬物を構成する根本要素の五行を象徴している。康寧殿の正門である嚮五門の外には便殿である思政殿・萬春殿・千秋殿など3軒の建物があって、康寧殿一郭の5軒と合わせると8軒になり八卦を象徴する。

以上の内容を要約すると重創された景福宮の核心部は正殿〔北極星〕→便殿3軒〔三光之

庭〕→王寝殿5軒〔五帝座〕順に配置され天文図の星座を模倣したといえる。次は方向を反対にして解釈すると、王妃寝殿〔太極〕→門〔陰陽〕→王寝殿5軒〔五行〕順に配置されていて、太極図説とそのまま一致していると言える。結論的に言って、重建配置計画案は易理と陰陽五行など建築外的思想をもとにしている点で朝鮮初期以来の伝統を継承していると言える。

第31図は、太極図と景福宮の建物配置を示す図（後掲書の武井一氏作成の図を横置きに直した）である。太極図は北宋の周敦頤（周濂溪1017-1073）が『易』の太極、両儀の宇宙生成論に五行を加えて図にしたものである。この図案を建物配置に応用していることになる。『易』には無極とは記されないが、太極だけでは何か物体のようなものに誤解される恐れがあるため無極を加えたものと考えられている。宋学を集大成した南宋の朱子の注には太極の他に無極があるわけではないと加える³⁴。朱子学は万物の存在を物理的根源である気と事物のあり方を規定する理によって説明し、宇宙・社会・人性を首尾一貫した理論で捉えようとしたところに特徴があり、高麗朝末期に朝鮮に伝えられ、李朝では官学になっていた。

景福宮交泰殿は、近代に昌徳宮大造殿として移築されたものであるが、元は王と王妃の寝殿であり、天地の陰陽が交わって良い後継者が誕生することを願ったものである。大棟のない特徴も天地の交合を妨げないものとしての理解が可能であり、また、極とは本来棟木の意味であるから、太極が無極であるとしたことから大棟を造らなくなったとも考えられる。

その交泰殿から生じた「気」は両儀門を通過すると康寧殿とそのまわりの四棟に達する。これらは五行に因んだ名称がつけられており、そこで響きあった「気」は五嚮門から政事の舞台へと流れていくと考えられている³⁵。

以上のように、19世紀後半になってからの朝鮮王朝の宮殿においても宮殿は宇宙を象るものであるという意識が受け継がれていたのである。王が天子ではあると信じられているわけではないが、人間社会を統制する秩序と宇宙現象を統制する理法を同一視した。このため、その背景にある儒教論理の概念図で宇宙観を示す、太極図を宮殿の建物配置に再現しているのである。

V. 平城宮第一次大極殿院の設計思想

IIで指摘したように、平城宮第一次大極殿院では高御座は天の北極、大極殿は当時の北極星であり、塼積擁壁は設計案Bを用いることによって具象的に内規・赤道・外規・黄道による宇宙の構造を象ったものと考えられる。では、大極殿院で他に具象的あるいは抽象的に象るものはないのだろうか。大極殿院は天皇と臣下が儒教的儀礼により、その君臣関係を再確認するところである。そこには術数を駆使した、天道に基づいた空間が計

画されたはずである。以下、その解釈を記す。

1. 大極殿院と朝堂院

(1) 紫微宮

藤原京の中心に位置するのが藤原宮大極殿ではなく、大極殿院南門である。『三輔黄図』に³⁶、「始皇窮極奢侈、築咸陽宮、因北陵營殿、端門四達、以則紫宮、象帝居、渭水貫都、以天漢、橫橋南渡、以法牽牛」とあり、宮殿を紫微宮、渭水を銀河、橋を牽牛にそれぞれ見立て、始皇帝の咸陽宮の端門が四方に繋がっていると述べる。大極殿院南門は紫微宮（第33図）の端門にあたるため、四方八達の都の中心に位置したのである。その藤原宮大極殿院では東面回廊の中央、大極殿の東に門の遺構が桁行6間検出され、7間の門が存在した可能性が高まった³⁷。これは隣接する東楼への区画の門として必要なものであった。ところが、平城宮第一次大極殿院では東西に直接つながる区画はなく、東面回廊と西面回廊について回廊基壇幅が広がる部分は確認できないことから、300mを越える南北に長い区画であるにもかかわらず、回廊基壇より大きい規模をもつような門は設けなかったと考えるのが自然である。設けたとしても通用門だろうか。紫微宮は東西を堀で囲まれていたため、紫微宮を象った第一次大極殿院は東西に門を設ける理念上、機能上の必要はなかったと考えることができる。それでも、回廊基壇幅を変えないで軒を上げるような門を想定するとすれば、藤原宮大極殿院での門の位置関係を踏襲し、大極殿の東西の方が適当であろう。塼積擁壁より南で、臣下のために大極殿院に横から入る門を想定しにくいからである。そのときは、『礼記』月令で為政者が日に擬えた行為をするように、天皇自身が東門から入り、西門から出るというような日に擬えた天皇の動きを想定する必要があると思われる。神武天皇の東征神話の中では、天皇は日の神の子孫であるのに日に向かって敵を討つのは天道に逆らっていると考え、日神の威光を借りて進軍することにしたとされているのである。

大極殿院自体が紫微宮を象るが、天皇自身は紫微宮にいたことが8世紀前半から中頃にかけて強く意識されている³⁸。平城遷都詔では「菲薄き徳を以て、紫宮の尊きに処り」、養老五年（721）二月十六日条の詔では「身、紫宮に居れども心は黔首に在り」、天平宝字元年（757）八月十八日条の詔では「五八数を双べて、宝寿の不惑に応へ、日月明を共にして、紫宮永配に象れり」とある。

『続日本紀』にある通り、奈良時代半ば恭仁宮へ移築されたのは第一次大極殿並びに東面と西面の回廊で、南面回廊と南門を残したことは中央区朝堂院の景観を変えないで利用できる意味で合理的である。しかし、東西の回廊に紫微宮の東垣と西垣を擬えていたとすると合理性だけで解釈することには躊躇せざるを得ない。

(2) 太微宮

日本古代の宮城中枢部は発掘調査の進展によって、大極殿院、朝堂院、内裏などの区画

の規模や位置関係が明らかになり、その特徴は政治の実態などと関連して理解されるようになってきた。平城宮で朝堂院が中央区と東区に二つ存在したことは大極殿に求められた儀式と政務の機能分離の試みに対応するものとして明解に説明されている³⁹。しかしながら、中央区の四朝堂と東区の十二朝堂の建物の数となると、各朝堂院に求められる機能の数や八省などの役所の数だけでは説明がつかない。このため、建物の数までは機能のみで計画されたわけではないのだろう。必要な機能と表象との調整を図りつつ、区画の中の建物の数などに意味を持たせたものと思われる。

『史記』天官書では十二の星は内を正し外を護る藩屏の臣で、天の中宮とともに紫宮とされる。『後漢書』志第十の天文上では「紫宮為皇極之居、太微為五帝之廷。」⁴⁰とあるが、十二諸侯府については言及しない。一方、『晋書』志第一の天文上には「太微、天子庭也、五帝之坐也、十二諸侯府也、其外蕃、九卿也。」⁴¹とあり、太微宮（第34図）は天子の庭であり、五帝の座であり、十二諸侯府とされた。『晋書』天文志が同心円の解釈に適していることは後でみるが、ここでもその天文観を具現しているように思われる。

第一次大極殿院南門は年中行事として一月十七日に射礼をみるためなどに出御する空間で、単なる門ではなく四堂からなる中央区朝堂院の正殿ともなる。このため、中央区朝堂院は五つの堂宇からなるとみることができ、平城宮で五帝の坐を表現したものであろう。平安宮では豊楽院として受け継がれる。一方、東区朝堂院は十二堂からなり、十二諸侯府を表現したものと思われる。その数十二は藤原宮から平城宮、平安宮に受け継がれる。隋代の洛陽城では宮城を紫微城、皇城を太微城と呼んでいたのである⁴²。大極殿院が宇宙を象ることは指摘したが、平城宮全体からみた場合の平城宮第一次大極殿院は紫微宮に見立てられて、二つの朝堂院は太微宮に見立てられ、皇城としての二つの性格を表すように思われる。

(3) 伊勢神宮との関係

平城宮の第一次大極殿院とその南の東西に二つ並ぶ朝堂院の構造は、天照大神を祀り、天帝すなわち太一が習合されると考えられている伊勢神宮の荒祭宮⁴³とその南で繰り返される式年遷宮の東西の敷地と配置関係が類似していると思われる（第35図）。式年遷宮は20年ごとで定着しているが、藤原宮・平城宮期の『諸雑事記』『二所太神宮儀式帳』にみると、持統四年（690）、和銅二年（709）、天平元年（729）、天平十九年（747）、天平神護二年（766）に行われている⁴⁴。平均すると陽暦と陰暦の調和する19年ごとに陽と陰の宮が入れ替わっているのである。平城宮の二つの朝堂院は中央と非中央で陽と陰の関係にあり、神の宮（宗廟）をも象ることになるのか。

2. 同心3円の中心と高御座の位置について

塙積擁壁の平面形設計には同心3円と偏円の交点を用いていた。『晋書』志第一の天文

中⁴⁵に「天子気、内赤外黄、四方所発之處當有王者」とあり、内規・赤道・外規と偏心円の黄道を描くことは天子の証と解せる。同心3円の中心、すなわち宇宙の中心にあるのが、“あまつひつぎ天日嗣”の高御座である。太陽は一年を通して宇宙の中心（天の北極）に行くことはなく、設計案Bの黄道たる偏心円が同心3円の中心たる天の北極に重なることもないのに、何故、太陽（日神）の後裔である天皇の玉座、高御座が宇宙の中心に置かれるのだろうか。宇宙の構造、天道に整合しなくなるのである。おそらくそれは、『晋書』志第一の天文上⁴⁶に「北極五星，鉤陳六星，皆在紫宮中。北極，北辰最尊者也，其紐星，天之樞也。（中略）第一星主月，太子也。第二星主日，帝王也；亦太乙之坐，謂最赤明者也。」とあることと関連する。北極五星の内の第二星が日を司るのである。このため、地上に写した宇宙の中心に“あまつひつぎ天日嗣”の高御座が置かれると考えられるのである。

3. 偏心円上の井戸について

偏心円上に位置する井戸SE7145は、3.5m、3.1mの隅丸方形の堀形で、深さは2.5m。井戸枠は完全に抜き取られており、版築で丁寧⁴⁷に埋め戻されている。

天水を得るには二つの方法があった。『文選』西都賦によると、建章宮の北には仙山を浮かべた太液池があり、中央の蓬莱山に漢の武帝は一对の銅柱を立てさせた。これは仙人が掌を広げて甘露を受けようにしたものであった⁴⁸。これが一つの方法で、もう一つは井戸を穿つものである。

小南一郎⁴⁹によると、漢代に編まれた『河図括地象』には「河の精がのぼりて天漢と為る」とあり、地上の黄河と天上の天の河は対応していた。魏晋南北朝の頃にできた道教教典『元始無量度人上品妙経』には「東井は天河の源なり」とある。『抱朴子』の佚文では天の河は北極から分かれ、一方は南中を過ぎ、他方は東井を経て、いずれも地平線から下は地中を流れて見えない南極で結合、環状をなすと考えられていたという。これらを考え合わせると、地上の水の源は天の河、とりわけ東井と考えられていたのである。

このため大極殿院の庭では黄道に擬える偏心円上に東井を象る“東”の井戸SE7145を設けた。この井戸のみが左右対称に造営されている大極殿院で対称を破る施設であるかもしれない。西の対称位置に井戸があったとすれば、南方七宿の中では西に位置する“東井”の位置関係を正確に写すのかもしれない。今後の調査に期待したい。こうした井戸は、『万葉集』巻一の五十二番「藤原宮の御井の歌」に歌われる占地上の重要性和井戸の神聖さを引き継ぎ、「天つ水」を汲むために設けるのであろう。「天つ水」は平安時代に採録された『なかとみのよごと中臣寿詞』では天皇の食膳に献上する聖なる水のことであり、高天原の皇祖神の呪言によって祝福された地中の聖泉の水のことである⁵⁰。

天皇による日本支配の正当性を説明するために書かれたのが記紀である⁵¹。その記紀神話では、天上界すなわち高天の原には天の安の河原（天の河）が流れ、近くには天の真名井、

すなわち東井がある。天照大神と素戔鳴尊のウケヒの場面では、天の安の河原で十握の剣と八坂瓊の曲玉を交換し、辺にある天の真名井に降り濯いで、それらから神々が生まれる。誓約の場が河原であること、その辺に井戸があることは大極殿院の庭を理解するのに重要だと思われる。大極殿院は君臣関係を再確認する誓約の場であり、天の安の河原を再現したものであるため、川原石が敷き詰められていると考えることができるのである。岩屋戸に籠もった天照大神を招きだそうと神々が祭りをした場所も天の安の河原であり、大極殿院の庭では天照大神や降臨した瓊瓊杵尊ににぎのみことと重ね合わせて天皇が群臣の前に出御するのである。

4. 塼積擁壁の平面形と勾配

キトラ古墳の天文図では黄道は赤道と同じ半径で表されたが、塼積擁壁の設計に用いた偏心円たる黄道は外規より大きく、宇宙の構造を正しく象らず、天道に則さないことになる。これをどのように解釈できようか。また、塼積擁壁に用いられている勾配はいかなる意味をもつのであろうか。この節では、日輪の中にいると考えられた三足鳥⁵²との関係をみてみよう。

(1) 黄道と幢幡

大極殿前庭に注目してみよう。その中軸線上には鳥形幢（第36図）、その東に日像幢・青龍幡・朱雀幡、西に月像幢・白虎幡・玄武幡の七本の幢幡が中軸線に直行して東西に並ぶ（第37図）。大宝元年（701）正月朔日、藤原宮大極殿院の南門に立てられたのが初見である。平城宮第一次大極殿院では第3図のSB7141と記された遺構がこれに当たるが⁵³、第二次大極殿院での幢幡遺構の検出を経て、二列の幢幡遺構と認識されるようになったものである。長岡宮大極殿院でも同様の幢幡遺構の検出例がある。平安時代の儀式書『内裏儀式』では幢幡の立てられた位置は大極殿南階から一六〇尺、『延喜式』で一五四尺である。塼積擁壁前の二列の幢幡跡のうち、北列は大極殿基壇南辺から159.8尺、南列は南面階段から約156.8尺である（第38図）。南階段が当初はなく、後に増設されたものと考えられるようになった⁵⁴が、その増設を考慮すると、北列が先行するとみてよいものであって、前庭東寄りで東井を象る井戸SE7145とほぼ並ぶことになる。四神は四方各七宿（二十八宿）から成るものであるため、日月と併せて、幢幡の列は黄道付近の星座・天体を直線状かつ立体的にし、天皇が宇宙に君臨することを前庭の臣下に顕示したものと思われる。同時に、黄（金）色の鳥形幢は四色の四神幡と合わせて五行を、月・日像幢で陰陽をそれぞれ表現し、陰陽の調和と五行の循環により天地和同を願ったと考えられる。

渡辺信一郎⁵⁵によると、中国では正殿前に鳥形が置かれた。南朝梁の太極殿前には東西に大鐘が設置され、その中間には宋の武帝が洛陽を平定したとき手に入れた、銅製の風見鳥である相風鳥が設置された（『宮苑記』）。また、前漢の霊台（天文観測施設）には、相風銅鳥

があり、千里を渉る風が到来すると動いた（『三輔黄図』巻5台榭）。皇帝は世界の八方の極地にある八極の門から発する八風を統御し、全世界に調和をもたらす存在であるため、天空・宇宙の中心を模した太極殿前に相風鳥が設置されるのは、必然のことであったという。なお、後世の事例になるが、清代初期の盛京皇宮（現在の瀋陽故宮）の中枢部清寧宮の庭には「索倫竿」という鳥の飛来をまつ満州族伝統の竿がある。清朝初代の太祖となるヌルハチの先祖を鳥が助けた伝説があるためである⁵⁶。王権を正当化する庭の本質を伝える事例として興味深い。

(2) 三足鳥と八咫鳥

新川登亀男⁵⁷によると、三足鳥は中国では道教神の西王母の侍者、不老長生の具現、王者慈孝の証、日之精とされ、天授元年（690）に則天武后は「周室嘉瑞」とした。日本では、玉虫厨子の日輪に描かれた三足鳥を早い例として挙げることができる。また、白雉元年（650）には三足鳥が出現し、祥瑞であることが判明したと記されるが、この時点ではその意味が即座にはわからず、充分には認識されていなかったことが知られる。なお、天武天皇の頃（十一年八月・十二年一月二日および七日）には三足鳥ならぬ三足雀が祥瑞としてみえる。

一方、八咫鳥（大きな鳥の意で、^{あた}咫は周代の長さの単位）は記紀の神武天皇東征伝説の中にみえ、天照大神が遣わした天皇の先導者である。『古事記』では「八咫鳥」、『日本書紀』では「頭八咫鳥」とされるが、三足鳥とは記されていない。

現在、熊野本宮大社では八咫鳥が祀られ三本足で描かれるが、いつから八咫鳥が三足鳥と同一視されたか、三足鳥の鳥形幢が大寶元年（701）や靈龜元年（715）まで遡りうるのかも明らかではない。幢幡中央にある鳥形幢（銅鳥）については、弘仁十四年（823）の『淳和天皇御即位記』に「立八咫鳥日月形」と記され⁵⁸、遅くともこの時までには幢幡の鳥形幢の鳥を三足鳥ではなく、八咫鳥としている。

ところで、藤原宮大極殿の中軸線、すなわち藤原京中軸線の南延長部付近には天武持統陵や考古学的に文武陵ともされる中尾山古墳、高松塚古墳、キトラ古墳が位置し、北延長部の京都市山科区には文武天皇三年（699）に築造した天智天皇陵が位置することはよく知られている⁵⁹。一方、藤原宮内裏の真東約12kmには慶雲二年（705）九月九日、大和国宇太郡に八咫鳥を祀る社（現在の八咫鳥神社、奈良県宇陀市榛原区高塚）が置かれ、この日は天武天皇の二十回忌、すなわち没後ちょうど十九年（19年で1章という単位がある）にあたる。その場所のさらに東方には伊勢神宮外宮が位置する。藤原京は『周礼』「考工記」を参考にして造営されたと考えられているが、これには「左祖右社」という原則も記されている。これは伊勢神宮で皇祖神を東に祀ることと無関係ではなく、律令では既存の伊勢神宮を宗廟に相当するものとして読み替えているのであり⁶⁰、実際、平安時代には伊勢神宮等の神社を廟と称していたことが知られる⁶¹。『文選』左太冲作「魏都賦」⁶²には「鈞繩の筌緒を聞き、二

分の正要を承く。日晷を搦り、星耀を考ふ。社稷を建て、清廟を作る。(コンパスや墨縄を手順に従って用い、春分と秋分の太陽の位置によって正しい方位を定め、太陽の位置、星の位置を計測し、土地の神、稷物の神、そして先祖を祀る廟を建設した。)」とある。藤原宮の東に八咫鳥神社と伊勢神宮外宮が正しく位置することもこの文脈から理解できると思う。皇祖神を導く八咫鳥を藤原宮の手前に置き、春分・秋分には太陽がそれらを一直線(たて経に)になぞることになる。八咫鳥とそれを祀る神社の位置は、完成をめざす律令国家の理念と空間秩序に関わるのであろう。

(3) 塼積擁壁の勾配の意味

塼積擁壁の本来的な高さは7尺か8尺と考えられる。その平面形の設計方法が解明できていなかった時点では、① 第一次大極殿院の形態に影響を与えたと考えられている唐長安城大明宮含元殿の龍尾道(広場から含元殿に至る通路)が七回屈曲したと『談録』に記されること、② 北斗七星は古代中国では天文運行の基準として、陰陽や五行を正すものとして尊ばれたことなど⁶³から、七に因んだ設計を意図し、高さは7尺であろうと推測した。しかしながら、後述するように塼積擁壁が意識しているのは日のイデオロギーのようである。

塼積擁壁は約70度の勾配をもつ。北緯34.7度の奈良において、夏至正午の太陽高度は23.4度を加えた78.1度、春分・秋分では55.3度であるし、擁壁は北に転んでいるため、太陽の高度とは関係しないようである。

塼積擁壁の勾配は2.7尺上がりの1寸転び(69度11分)や、1尺上がりの3.8寸転び(69度11分)というような勾配ではなく、施工にあたっては8尺上がりの3尺転び(69度26分)で設定したと考えられる。現在も高さを断定することはできないが、8尺は古代中国において日の影を用いて方位を割り出したり、太陽高度を測るために立てた表と呼ぶ棒の長さでもある。また、前述したように天地人は九・六・八に対応し、大極殿院で南から600大尺の塼積壇を基準に、そこから上の900大尺までが天皇の独占空間である「天」、塼積壇までが臣下の広場で「地」⁶⁴、それらの間にあるのは「人」であって、高さは8尺でなければならないのである。塼積壇底の標高70.4m、高さを8尺とした場合、その天端の標高は72.76mとなり、大極殿基壇南北中央の復元地盤73.0mに近くなる。

塼積擁壁の転ぶ角度に関わる3は後述する天地人三才の三である。また、3と8という数は陰陽五行説で東(日の正位)に配当されるもので、陰陽五行説の日本での教科書『五行大義』巻第一⁶⁵には「木は天に在りては三と為し、地に在りては八と為し、三八東に合す。」とある。

上述の通り、八咫鳥と三足鳥の同一視が靈龜元年(715)まで遡れるかは確証がないが、八咫鳥は日神が遣わす鳥であるから、この時までには両者が同一視されていたのではなかろうか。東(日の正位)に配当される3と8という天地の数を用いて塼積擁壁の勾配が造られ

ているのであって、数を介して、象徴的に三足鳥の八咫鳥を象ったと思われる。

(4) 塼状飾板の解釈と塼積壇立面の復元的考察

塼積擁壁の前面からは中央部が饅頭型に膨らんだ同心円状の文様をなす瓦質の遺物が出土している。塼積壇に嵌め込んで装飾したものとみられ塼状飾板と呼ばれる⁶⁶ (第39図)。その中央部の形は、奈良時代からは降るが、高麗時代以降の「日暈文」または「日暉文」などと呼ばれる瓦が参考になるであろう⁶⁷ (第40図)。塼積壇の天端付近にこれを飾るのであるが、塼を布積みした中に収めなければならないため、その外形は方形となるはずで、全体としては「天円地方」を象ることになる。

ところで、『古事記』序の太安万侶の古事記撰録には和銅五年(712)正月廿八日付けで、「伏して惟ふに、皇帝陛下、一を得て光宅し、三に通じて亭育したまふ。紫宸に御して徳は馬の蹄の極まる所に被び、玄扈に坐して化は船の頭の速ぶ所を照らしたまふ。日浮かびて暉を重ね、雲散りて烟に非らず。柯を連ね穂を并す瑞、史書すことを絶たず、烽を列ね譯を重ねる貢、府空しき月無し。名は文命よりも高く、徳は天乙にも冠りたまへりと謂ひつべし。」とある⁶⁸。天皇が皇位に就いてから徳が天下に満ち、天地人の三才にわたり万民万物を化育しているとする。それに続いて、皇居にいて、地の果て海の果てまで徳が行き渡っているとし、祥瑞の例を列挙している。元明天皇の聖徳に感応して太陽が輝きを増すこと、雲でもなく煙でもないもの、連理の枝や一本の茎に多くの穂が出ることなど、書記官は絶えず記録しているというのである。この序文を記した和銅五年(712)、太安万侶は太陽が輝く「暉」を祥瑞とするが、祥瑞条に日暉なるものは存在しない⁶⁹。しかしながら、めでたいものの筆頭に「暉」を挙げていることは注目してよい。

塼積擁壁の勾配に用いた3と8の数字の積には意味を見いだすことができる。3掛ける8で24、二十四は太陽の位置で決まる二十四節気と関連する。前述の『旧唐書』の明堂風に言えば、「三為陽数、八為陰数。三八相乗、得二十四。故法二十四気。」となろう。これはいつの季節にも天皇の支配する天下に天皇の徳が行き渡って、嘉応として、太陽が光り輝き天下に泰平をもたらすと考えた術数と思われる。塼積壇東西長332尺の中に24個を、10数尺の間隔程度で配するのではなかろうか。閏月のない年間の月の数と関わらせば間隔は12尺となる。

唐長安城大明宮含元殿の前面の塼積擁壁や大明宮麟徳殿の基壇などには皇帝の象徴たる螭首が飾られていた(第41図)。第一次大極殿の塼積壇には太陽神天照大神の子孫たる天皇を象徴する、「日暈文」ならぬ「日暉文」が飾られていたと考えられる。それはおそらく木製、漆塗り、金箔貼りの日像幢のようなものであって、当然、八方各三本の光芒を伴うであろう。塼状飾板は、それを固定するために塼積擁壁の中に嵌め込まれたものと思われる。

(5) 塼積擁壁の平面形

塼積擁壁の設計の方法は同心3円と偏心円を用いて宇宙の構造を象ったことを先にみたが、塼積擁壁各点を結ぶ複雑な平面形自体は何を表すのであろうか。

「天子南面」という思想に基づき天皇の視点で（南を上にして）、塼積擁壁の平面形を見、塼積壇中央の木階（2間分三列の柱穴が並ぶ）を胴体に、偏心円たる黄道を日輪に見立てれば、神武天皇を大和に導いた八咫鳥が日輪の中から羽ばたく姿に見えないだろうか。南面階段は幅広の一基に改められる前は三基であった。階段下から塼積擁壁上部まで削平が著しく痕跡は全くないが、三基の階段の時期、想像力逞しく、そこに三本の通路として方塼を敷けば、大極殿を囲む八咫鳥となる（第42図）。塼積擁壁の平面形は、形態的にも八咫鳥を象っているように思われる。

このような平面形を作るために、偏心円（黄道）を同心3円の中間の円（赤道）より大きくしたと考えられるが、もうひとつの意図も窺える。すなわち、黄道は太陽の通り道であり、それを外規すなわち観測できる宇宙より大きくしたのは、日神天照大神の子孫たる天皇が宇宙よりも偉大なことを示す皇孫思想の現れと解釈できると思う。

5. 大極殿の屋根の意味

(1) 天の思想と屋根と雨落溝

大室幹雄によると⁷⁰、古代中国の春秋期の部族は祖霊の上る星をそれぞれ持っており、部族間での戦いで勝者は敗者の社を屋根で覆った。これは社と祖霊のすみかである星の交流を断ち、その部族が再起することのないようにしたためという。天を祀る天壇の圓丘（北京）や、社稷壇（北京およびソウル）などに屋根がないこと、北京の社稷壇では祭祀の間、飛来する鳥を追い払うしきりがあるということも天との交流を妨げるものとして理解できる⁷¹。なるほど、天壇祈念殿の三重の屋根の頂部にある宝頂は釣瓶を伏せた形態をしており、天水を汲む意味の説明が一般になされてもいる。屋根は風雨を避ける機能だけではなく、形態を手掛かりに意味を捉えることも必要である。天井の「井」の字⁷²は篆書では中央に点があり、釣瓶を表すという。天井が天を象徴し、天に穿たれる井戸が装飾天井である藻井ならば藻井のある天壇祈念殿の頂部に釣瓶型の宝頂が載ることも天の思想の表現として理解できる。

また、前述したように景福宮の王と王妃の寝殿であった交泰殿に大棟がない特徴について、陰陽の交わる所には、天地の間に妨げるものは不要とする解釈もある。高御座と大極殿心が一致せず高御座の真上に大棟がないのはこの文脈において合理的だと思われる。

大極殿の軒下には雨落溝の検出例がなく、拳大の礫が敷かれる。儀式が行われる予定でも雨の時は廢朝となるため、大極殿で儀式の行われる時は結果として天の気が良いときであり、天皇が出御する時は天地の間に雨雲のような妨げるものはなく、天地が相通じてい

るのである。このため雨落溝は思想的に必要なないのである。

(2) 屋根形態と装飾の意味

奈良時代前半の平城宮第一次大極殿については遺構が希薄であって上部構造は不明である。しかし、この大極殿と歩廊が恭仁宮へ移築され、工事が終えたことは『続日本紀』天平十五年（743）十二月二十六日条にみえ、その大極殿の発掘調査では身舎の桁行と梁行の寸法が異なるため、入母屋造と考えられている⁷³。天平十四年（742）正月一日の恭仁宮の朝賀の時は平城宮第一次大極殿の移築がまだ完了しておらず、四阿殿を仮設している。四阿殿は寄棟造の建物と考えられるので、本来第一次大極殿は寄棟造の屋根であったとの想定も一方ではある⁷⁴。

奈良時代後半の平城宮第二次大極殿については身舎の桁行と梁行の寸法が同じで、屋根構造は寄棟造りに復原されている⁷⁵。その理由として、東大寺や唐招提寺金堂は寄棟造であること、中国では寄棟造が宮殿建築の最高級屋根とされ、8世紀は唐制の移入に熱心であることをあげられている。

第一次大極殿はもともと藤原宮で建造された大極殿で、それが平城宮へ移築されたと考えるのが有力である⁷⁶。寄棟造の屋根は降り注いだ甘露をあまねく四方の民に分配できるような形であり、天子の徳を示す形態と解釈できる。しかしながら、唐との国交回復前に成立した大極殿であるため、どこまで思想を理解して造営したか、重層建築だとしても初層の柱配置が二層目の屋根形態を規制したのか等は検討課題であり、移築時の改造も考慮するなら一層判断が難しくなるところである。

さらに、第一次大極殿の大棟の頂部の装飾となるとその有無も含め直接的な手掛かりはなく、その形態が、鳳凰なのか、法隆寺夢殿の火焰宝珠のようなものなのか、天水を汲む水瓶のようなものであったかも不明である。ところで、北魏洛陽城について記した『洛陽伽藍記』卷一城内の永寧寺の説明で「塔の北に仏殿が一つあり、作りは大極殿に似ていた。」とある⁷⁷ように、仏殿と宮殿は大きくは変わらなかったようである。第一次大極殿の大棟中央の飾りは中国での仏殿等の事例を加味して宝瓶と蓮華の組み合わせからなる宝珠型が想定されている⁷⁸。古代中国では蓮華文は宇宙、特に天の北極の象徴であり⁷⁹（第43図）、蓮と瓶の意味するものは、天の思想から文脈的に捉えることができると思われる。

(3) 屋根瓦の色の意味

平城宮第一次大極殿の屋根に葺かれた瓦は黒色が強いことが特徴である⁸⁰。中国で同時代の長安城大明宮含元殿、麟徳殿など重要な宮殿では、北魏以来の伝統を受け継いで黒色磨研瓦を使用している。このため奈良時代初期の一時期、こうした伝統を模倣したかどうかは検討課題とされる⁸¹。第一次大極殿で黒色の瓦が用いられたことは瓦の制作技法の系譜から理解することも可能であろうが、思想的に捉えてみる検討も必要と思われる。

大極殿では柱は丹塗り、壁は白い漆喰塗り、連子窓は緑青塗りと考えられる。大極殿をはじめ、平城宮の重要建物の壇上積基壇の化粧に使われる石材は二上山産の凝灰岩で、黄色味が強いことが特徴となっている。すなわち、瓦が黒いことは、大極殿全体で五色を用いることになる。黒は五行では水にあたり、火気をさらう建物の屋根には都合がよいのである（棟に鯨がのることや民家の蔵の軒などに水と記されるのと同様である）。また、大極殿は全体で桁行9間梁行4間の規模であり、陰陽の数が用いられている。大極殿は陰陽の複合体であり、五行の体現なのである。

(4) 大極殿院出土軒瓦の解釈

蓮華文の軒丸瓦は寺院だけでなく藤原宮から宮殿の軒先も飾るようになる。瓦については門外漢であるが、意匠の意味やそこに用いられる数の思想的側面については研究が少ないようである。当然すべての瓦を説明し得るわけではないが、前述のような設計思想で出土した軒瓦の文様をみた時、解釈できるようになった文様もあり、以下に考えを記すことにする。

藤原宮 代表的な藤原宮大極殿院出土の軒丸瓦は中房に1+5+9の15の蓮子（雌しべの入った穴）、弁の外側に珠点40を配する（第44図）。易の教典『五行大義』では15は生数と呼ぶ1～5の数の和、40は成数と呼ぶ6～10の数の和である。総数55は天地の数とされ⁸²、易では大衍の数といい、唐代明堂案の柱の高さに55尺を用いている。この瓦と組む軒平瓦は蛇行する蔓と蕨型の葉柄部からなる唐草文として理解されている。嘗ては天星地水と呼ばれた瓦であるように、波打っているのは水面であり、水面上の蕨型は風、水面下の蕨型は渦巻く波、上部の点は星で、下部の鋸歯は山並みの具象に見えないだろうか。『易』繫辞上传には「易は天地を準う」「仰いでもって天文を觀、俯してもって地理を察す」とある。

なお、藤原宮出土の鬼瓦は三重の重弧文である。軒平瓦と同様、宇宙の構成要素としての天地人「三才」を表現し、その調和を願ったものと思われる。

軒丸瓦の中の七曜文 和銅元年（708）発行の和同開珎に先立つ日本最古の銭として知られるようになったのが、天武天皇の時代の富本銭である。松村恵司⁸³によれば、銭文の上下に記される「富本」は富国富民が国政の基本であることを中国古典から引いたもので、銭文の左右に並ぶ七つの点は七曜文と呼ばれ、陰陽五行思想に基づくものである。七曜は天上にあっては、日（太陽）・月（太陰）と五惑星、地上にあっては陰陽とそれらが生み出した、万物の元になる木火土金水の五行を意味する。陰陽が正しく作用し、五行が循環する様子を図像化したものが七曜文である（第45図）。『古事記』はその序で、天武天皇の治世を、「乾符を握りて六合を摠べ、天統を得て八荒包ねたまひき。二氣の正しきに乗り、五行の序を齊えたまいき」と称えていることが示唆するように、富本銭の銭文は天円地方という中国古代の宇宙観を円形方孔の形に表して民衆を啓蒙しつつ、陰陽の調和を願うものと理解

されている。

この七曜文は、藤原宮の時代の国立の大寺院である大官大寺の軒丸瓦にも使われる（第46図）。蓮華文の中房には中心部に一個、周囲に六個の蓮子が配される。この時期の正史には、陰陽の調和が乱れたことなどが散見される。慶雲二年（705）四月三日条では陰陽が調和せず、穀物の作柄が悪く、人々が飢えに苦しんでおり、五大寺に金光明経を讀経させたとある。当時の仏教は国家の安泰を願う役割が大きかったため、七曜文を含むこの蓮華文も陰陽の調和を願う意味があったのであろう。一方で、窮状に対処する方法として、陰陽に因む呪術も行っている。慶雲二年（705）六月二十七日条では、市場の南門を閉じさせたところがあるが、『周礼』考工記に前朝後市というように市は陰に属するものであり、陰の気が南へ逃げないように南門を閉じるという、呪術をしているのである。やや下るが、吉野の丹生川上神社では天平宝字七年（763）、祈雨のために黒馬を奉り、宝龜八年（777）には止雨のために白馬を献じている。天の陽気が強いと旱魃になり、陰気が強いと水害が起きるため、中和のために黒馬白馬を献ずるのである。ほどよい日照と時宜を得た降雨が陰陽の調和となるのである。

平城遷都後の平城宮第一次大極殿の軒瓦で最も多い組み合わせを示した（第47図）。その軒丸瓦は中房に1+6の蓮子、弁の外側に24の珠点を配する。珠点は二十四節気を表し、中房の七曜文と合わせ、いつの季節も陰陽が調和することを願うのであろう。

難波宮 難波宮大極殿院では、重圏文軒丸瓦が出土する（第48図）。櫻井久之⁸⁴は、三重の圏線直径とキトラ古墳の天文図の内規・赤道・外規の推定半径を比較検討し、三円は天文図を意図したものとした。筆者も同感である。しかし、その瓦当中央に「右」正字・裏字を記したものや、その軒丸瓦と組む重郭文軒平瓦では瓦当中央付近に十字のあるものが出土しており、意味は明らかでない。

古代中国の宇宙認識には、天は傘のようで地は碁盤のようとする蓋天説⁸⁵があった（第49図）。『周髀算経』は蓋天説をとる周代の数学書で、天球上を七曜（日月五星）が右（東）へ動いている現象を説明するのに、天は左（西）へ廻っている確^{ひきうす}で、七曜はその上を右へ這う蟻に喩えた（『隋書』天文志も『周髀算経』を引用する）。『周髀算経』は奈良時代には重要視され、これを理解していない役人は出世ができないほどであった（天平三年（731）三月七日条⁸⁶）。熒惑^{わく}（火星）は地球に近い外惑星であるため、地球との位置関係で天球上を左へ戻るように観測される逆行現象があり、養老四年（720）一月十七日条、神龜元年（724）七月二十日条に観測記事がある。天人相関思想から天子は天の正常な運行に責任があったため、こうした異変は、不祥であって、天皇の不徳を意味した。そのため天文を観測する陰陽寮は異変を観測したら天皇に密かに奏上することになっており、古来天文学は宮廷の秘儀であった。神龜二年（725）九月二十二日条には、聖武天皇は天の教えと命令は明らかではなく、心を

尽くしても感応がなく、天は星の運行の異常を示し地は振動を起こしているとし、災異を除くべく三千人を出家させ、諸寺では經典の転読を行わせたとある。天平宝字二年（758）八月一日淳仁即位宣命に「日月の運行は常に正しく、それによって天地は相通じあって安泰」と考えられていたように、七曜が右へ廻る天の順調な運行と、地上の陰陽の調和、五行の循環は、天下泰平の必要条件なのである。

また、古代中国の宇宙認識には、天は鶏卵の卵殻のようで、地は卵黄のようとする渾天説⁸⁶もあった（第50図）。重圏文の軒丸瓦は透明な天球（天蓋）に内側から記した右の字を天球の外側から見たデザインである。天球の外側からの視点があったことは、後漢墳墓武梁祠の画像石や北朝鮮の支石墓の天井石、浙江省上虞県発見の唐代天象鏡、正倉院御物中倉の青斑石龜合子⁸⁷、同じく北倉の具竹鞞杖刀⁸⁷などの七星剣刀身、式盤（陰陽師が使う道具）等に北斗七星が裏返しに描かれていることから知られる。『万葉集』巻一の五十番「藤原宮役民の作る歌」に歌われる「囟負える奇しき龜」の囟も青斑石龜合子のようなものであったにちがいない。また、『漢書』『郊祀志』、『文選』の「七命八首」や「甘泉賦」では宮殿の高い楼閣に登り、日月を下に見るほど視点が高くなると、天球を外から見た「倒景」をみることができるとする。天帝の視点は地上の人間とは逆なのであり、裏北斗を描くことは天帝の視点を獲得し、天意を得たことを意味すると思われる。新羅の月城（慶州）出土の軒丸瓦の瓦当に「在城」の裏字を記したものがあつた（第51図）が、拡大解釈すれば裏字を刻むことも天意を得ることに繋がるのかもしれない。

右裏字は、七曜の右への順行を願って透明な天球に書いた右の字を、天帝が外側から観て了承したことを示す徴で、天帝が見やすいように裏字で書けば正字となって示されるものであろう（第52図）。この徴は古事記の序に言うところの天武天皇が得たという乾符に相当するであろう。これによって中心を外している重郭文軒平瓦の十字文は、偏心円で表される黄道の中心の象徴であり、黄道の極には星がなかったために十字で示したと理解できる。中心を外す意味を重視すれば十字文を記す軒平瓦の円弧は同心三円の一部か、それを変形させたものと考え得えよう。宇宙の構造を知り、天意を把握していることを軒先にも誇示するのは、壬申の乱を勝ち抜き、天文と占星術に通じていたという天武天皇の皇統（天武天皇から称徳女帝まで）による天下支配の正統性を示すようである。

以上、三ヶ所の大極殿院出土の軒瓦を見てきた。それらの意匠は異なるが、宇宙観を映しつつ国の安泰を願うめでたい文様であることは共通する。具象的か抽象的かという別はあるが、軒瓦の文様に至るまで“宮殿は宇宙を象る”という設計思想が実現されているのである。なお、平城宮第二次大極殿院出土の軒瓦の文様についてはこの文脈での説明は難しい（第53図）。天平七年（735）五月二十四日、宮中と大安寺・薬師寺・元興寺・興福寺で災害を除去し、国家を安寧にするため大般若経を転読し、天平九年（737）十月二十六日に

は第一次大極殿で金光明最勝王經の講義を行っている。第二次大極殿の瓦の文様と大極殿院で天下泰平の手段として行われる仏教行事については、仏教思想や遣唐使が見たであろう洛陽宮明堂での仏事などと併せて理解すべきものと思われる。

6. 大極殿と大極殿院の数字的意味

(1) 柱の数と柱間の数、基本単位

柱の本数44 藤原宮から長岡宮まですべての大極殿は、身舎が桁行7間・桁行2間で、四面に廂がつくため、全体で44本の柱を有する。天壇の祈念殿と同様、中心近くの柱に四神、それを囲む柱に十二支、その他に二十八宿が配され、柱の数に意味がある故に難波宮大極殿院や平城宮第二次大極殿院で大極殿の建物の実長が変わっても柱間の数と柱の数は変わらなかったと考えられよう。キトラ古墳と同時代の高松塚古墳の石室壁画では天文図、日月図、四方を示す四神図が共通し、キトラ古墳には時間を象徴する十二支が獣面人身像の形で描かれている。44が象徴するものは大極殿内の壁画の画題や高御座の意匠にも直結すると思われる。

東面・西面回廊の柱間数と尺長 平城宮第一次大極殿院の東面および西面回廊は桁行柱間が15.5尺という半端な寸法を用いており、南北方向の回廊の端々では72間である。天壇の長廊と同様、72という曆に関わる数字に意味（七十二候）を見だし、時空という意味での宇宙を象るのであろう。

回廊の心々距離では900大尺で、小尺にすれば1.2倍の1080尺になることははじめに述べた。1080は『漢書』「律曆志」⁸⁸に「天は一をもって水を生じ、地は二をもって火を生じ、天は三をもって木を生じ、地は四をもって金を生じ、天は五をもって土を生ずる。五勝が相いか乗って小回転を生じ、乾坤の数を乗ずることによって大回転を成す。陰陽は相い類するものを並べあわせ、相い交錯して成るものゆえ、九・六の変化は六爻一卦一を上下する。三微で著をなし、三著で象一九一をなし、二象で十八変して卦をなし、十八を四倍して易をなし、七十二となるが、これは三統を三倍した九と四時を二倍した八とを乗じた数である。これを三倍すれば乾の数二百十六を得、これを二倍すれば坤の数百四十四を得。陽九によってこれを九倍すれば六百四十八となり、陰六によってこれを六倍すれば、四百三十二となり、都合千八十、これが陰陽各一卦の微算の数である。」とあり、宇宙を語るのに都合のよい数字でもあった。

基本単位40尺 塼積擁壁に用いた円の基本単位は40尺であり、大極殿院の規模も40尺の倍数になっている。設計案Bでは同心円心と偏心円心は120尺（40尺×3）離れているため、40尺の3～9倍の数が4を除いて使われている。四は不吉なことに通音するため忌避したものと思われる。大極殿前庭に臣下が入ったか否かについても議論があるところであるが、高い塼積擁壁も儒教的な君臣の身分秩序を視覚的に示すものならば、渡辺晃宏⁸⁹の指摘の通り

臣下を招き入れたのであろう。前庭で臣下が整列する場所は、外規の外側に身分に応じて40尺間隔でということになる。

2005年、平城宮第一次大極殿院の南にある中央区朝堂院で大嘗宮の遺構が一期分検出された。東区朝堂院では五期の遺構が既に検出されており、南薬園新宮で即位した孝謙天皇を除き、奈良時代に即位した天皇の大嘗宮の遺構がそろったことになる。中央区の場合も含め各時期の大嘗宮正殿の位置関係をみると、40尺ずつ南へ移動していると指摘されており⁹⁰、古代の朝庭において数字がいかに重視されたかの認識を新たにする。40の意味については、次の事例が参考になる。

『続日本紀』天平宝字元年（757）八月十八日条にみると、蚕が「五月八日開下帝釈標知天皇命百年生息」と文字を綴ったものが献上され、これによって天平宝字に改元されることとなる。その文字の意味を孝謙天皇が群臣に議論させ、臣下はその意味を奏上した。天皇は「五月八日の五と八の数字を並べて掛けるならば、天子の聖寿の不惑（四十歳）に通じ、日と月はともに明るく、皇室の末永い繁栄を象徴する」⁹¹と加えた。こうした数値とその積についての天皇の見解は単なる個人的な思いつきではなく、編者を含む知識層の認識に共通するものとみるのが自然であろう。40は前述したように成数の和であり、五行の5と天皇が支配する国土の方向感の8を掛け合わせたもので、最小公倍数はともに調和する数字として重視されたものと思われる。

（2）各大極殿院の規模や東西、南北の規模の比率

藤原宮大極殿院の東西長と南北長の比は3対4であり、『周髀算経』でも触れる鉤股弦の定理と関係するのかもしれない。

平城宮第一次大極殿院の回廊の長さは前述の通り、東西500大尺、南北900大尺、その比は5対9であって、中国の紫禁城正殿である太和殿とその後方の中和殿・保和殿が建つ三重の大基壇の比率と同じである。『易』の注釈書には「王者居九五富貴之位」などとあり、重視された数値の組み合わせであった。九は最大の陽数、五は陽の真ん中の位であり、至高中正の君子が万民に恩恵を施すことを象徴するという。前述した飛鳥浄御原宮の大極殿と考えられている遺構が桁行9間、梁行5間であることについても同様の指摘がある⁹²。

難波宮・平城宮第二次の各大極殿院はともに大規模な区画ではあるが、回廊中心間の距離は半端な寸法を有し、不可解なものである。前者が南北263尺、東西342尺、後者が南北267尺、東西380尺と報告される。ところが19尺の倍数を基本としているようである。このような基本単位を推定したのは藤原京造営のテキストになったと考えられている『周礼』考工記が「周人の明堂は九尺の筵を度とす。東西九筵、南北七筵、堂のたかさ崇一筵」とあり、実際、隋代洛陽城正殿の乾陽殿も基壇の高さが9尺⁹³であったことなどによる。9尺ではないが、東西長は順に19尺の18倍と20倍である。南北はともに266尺なら19尺の14倍に

なるが、若干異なるのは東と西の回廊には門が開かず、回廊の柱間が等間隔では理想的な数値を作れなかったと思われるからである。当時の暦は太陰太陽暦で、一太陽年の長さを365と4分の1日とし、19太陽年が235（ $12 \times 19 + 7$ ）朔望月とはほぼ一致するため、19年（一章）の間に7閏月を入れる（十九年七閏法）。「暦数は閏をもって天地の中和を正す」と『漢書』「律曆志」にあるように、まさに一九は陰と陽を調和させる聖なる数であった⁹⁴。

各大極殿院の規模に用いられた数値や比は一定しないが、象数学を用いて竣工予定年等の年を六十干支の数に置き換え、時空という意味での宇宙の調和を図っていたのではなからうか。

VI. 大極殿院と陰陽寮

(1) 陰陽寮とは

大極殿院の計画技術者はいかなる人たちであろうか。宮殿の造営であるため、造宮省などの役所があたることになっている。しかし、上述の遺構の状況や出土遺物から、彼らが天文・易・暦・数学に関わる知識を持つことが窺える。正史の天平宝字元年（757）十一月九日条に官人の学ぶべき典籍として「天文生は天官書・漢晋天文志・三色簿讀・韓楊要集。陰陽生は周易・新撰陰陽書・黄帝金匱・五行大義。曆算生は漢晋律曆志、大衍曆議、九章、六章、周髀、定天論。」とあり、小論で言及した典籍を含む。天文生らが所属する陰陽寮が大極殿院の計画に関わるのであろう。

斉明天皇の六年（660）五月条には、「皇太子、初めて漏刻を造り、民をして時を知らしむ」とあり、中大兄皇子が造った漏刻の遺構が飛鳥の水落遺跡である。天武四年（676）には、天文占の施設と考えられる占星台が造られているが、この年が陰陽寮の初見であり、この時までには陰陽寮が成立していたと考えられる。こうした組織が作られるまでは渡来人の技術導入が必要であった。百濟から継体天皇七年（513）に五経博士、欽明天皇十五年（554）に易・暦・医・薬の博士の来日などがあった。

陰陽寮⁹⁵は中務省の被管官司で、頭、助、允などの事務官と陰陽博士、曆博士、天文博士、漏刻博士などがおり、天文気象現象の吉凶・妖祥の観測とその密奏、造曆、漏刻の管理と報時、卜占、相地、それに陰陽生、天文生、曆生の教育が職掌である。密奏とは陰陽頭とよばれる陰陽寮の長官の特別な任務で、天変地異があれば天皇に密かに報告しなければならないものであった。それは前述した通り、天子の不徳が災異として出現すると考えられていたため、天皇の評価にあたることになるためである。唐の官制では、天文・暦・漏刻を管掌する太史局と、卜占を管掌する太卜署に分かれていたが、日本ではそれらをあわせて陰陽寮一官司とした形となっている。唐官制にくらべ卜占部門が重視され、一方、漏刻博士は事務官として位置づけられているなど、漏刻部門が軽視されている点の特徴である。

(2) 陰陽寮と宮地の相地

天武天皇は、天武十三年（684）二月二十八日、陰陽師らを畿内に派遣し宮都候補地を探索させ、三月には宮室（藤原宮）の地を確定している。陰陽師の初見である。

2001年の藤原宮大極殿院の発掘調査⁹⁶では、大極殿院東門の北東で大極殿院東門の北東で天地、四海、地水火風などの陰陽五行説に関連する文字が多く記された須恵器皿が出土し、造営に関係し呪術的な行為が行われた可能性が高いと考えられている。

『続日本紀』和銅元年（708）二月十五日の平城遷都の詔では、「今、平城の地は、四禽凶に叶い、三山鎮を作し、亀筮並びに従う、宜しく都邑を建つべし。」とあり、このときまでに陰陽師が平城京の地をみたことは確実である。また、『続日本紀』延暦三年（784）五月には、藤原朝臣種継が陰陽助外従五位下船連田口などを伴って、長岡の地を見ている。

以上のように、陰陽寮は相地、すなわち宮都造営の基本構想である立地計画に深く関わり、造成工事施工段階でも呪術によって関わっていた可能性が指摘できるのである。計画・設計段階での関与の可能性も高いと思われるのである。

では、陰陽寮の技術者たちはいかなる人々であったか。『続日本紀』文武天皇大宝元年（701）八月二日の条に、三人の僧が還俗させられ、本姓に復したことが記されるが、この三人は『正倉院文書』の「官人考試帳」に陰陽寮の役人四名の中に名を連ねている。陰陽師の高金藏・文忌寸広麻呂、陰陽博士の録兄麻呂、天文博士の王中文であり、文忌寸広麻呂以外は僧侶の時に新羅留学をしており、官人に任命するために勅命還俗させたものという⁹⁷。また、大宝三年（703）には新羅僧行心の子で「頗る芸術に涉り、兼ねて算術を知る」とされた隆観（金財）が還俗させられている。学問が難しく、就職には不利で、測量などの雑務にも関わっていたらしく、学生の教育は十分ではなかったと考えられている⁹⁸。『続日本紀』天平二年（730）三月二十七日条では、陰陽・暦学の後継者がなく、博士が高齢で学業が絶えることが懸念されていたことがみえる。留学僧の知識を活かして陰陽寮に関わり、第一次大極殿院が計画・設計されたのだと思われる。

VII. おわりに

平城宮第一次大極殿院の塼積擁壁の平面形や勾配に用いた数字に、当時の宇宙観や易などの思想的背景を探った。同時代の新羅の王宮あるいは三国時代の王宮についても中国から同様の影響を受けているものと推測され、今後の発掘調査に期待したい。

今回述べた内容の延長上で高御座の復原考察が必要である。『文選』玄思賦や易の思想、『淮南子』で天下の中心にあるという建木、記紀神話（国産みや天孫降臨）などを参考に、正倉院の白石板を伝世する遺物と考えると現存する高御座とは異なるイメージのものとなる。法隆寺金堂の須弥壇と天蓋や、韓国の現存する宮殿に置かれている玉座と天蓋状の唐家が

近いと思われる⁹⁾。紙幅も尽きたので他日を期して稿を改めたいと思う。

本稿のIV章以外は、日本造園学会誌『ランドスケープ研究』に掲載された拙稿を参考にしたので、詳細については下記を参照されたい。

「遺跡の遺構解釈と復元整備における文脈について」第65巻第5号、2002年、pp.421-426。

「平城宮第一次大極殿院前庭のデザインとその思想」第66巻第5号、2003年、pp.361-366。

「大極殿院の規模とその思想・計画・設計に関する一考察」第67巻第5号、2004年、pp.361-366。

「大極殿院の設計思想と出土遺物の解釈」第68巻第5号、2005年、pp.445-450。

「大極殿院の設計思想」第69巻第5号、2006年、pp.355-360。

註

- 1 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 XI 第一次大極殿地域の調査』奈良国立文化財研究所30周年記念学報（学報第40冊）、1982年。第117次の1980年までの、平城宮第一次大極殿院の東半分と北面回廊地区（大膳職）を中心とした調査成果をまとめたものである。その後は、大極殿を含む、西半分の要所の調査や遺構再確認の調査を実施し、順次年報や紀要に報告されている。
- 2 東面回廊南北長の場合、心の南端と北端の距離を1080尺とし、遺構から算出した基準尺は0.294mとなる。0.295で実長を割ると1076.6尺となる。回廊柱間寸法が15.5尺で68間、南面・北面の回廊の梁間が12尺であるため、各1間分を加えると1018尺となる。基本的な計画寸法1080尺と実施段階での寸法には違いがあり、これは東面・西面に門が開くかということとも関係すると思われる。本文 p.26参照。
- 3 飛鳥御浄原宮の大極殿と考えられている伝飛鳥板蓋宮の東南にあるエビノコ郭のエビノコ大殿は掘立柱建物であるが、その区画の南北の中心は建物中心のやや北側にあるようである。
- 4 寺崎保広・金子裕之「遺構の性格」『平城宮発掘調査報告 XIV 第二次大極殿院の調査』奈良国立文化財研究所創立40周年記念学報第51冊、奈良国立文化財研究所、1993年、pp.145-170。
- 5 小野健吉「建物配置計画」『平城宮跡発掘調査報告 XIV 第二次大極殿院の調査』（前掲註4文献）、pp.137-144。
- 6 第一次大極殿の遺構は、地覆石の据え付けと抜き取りの遺構が溝状に検出されているのみで柱位置は不明である。第一次大極殿は、奈良時代半ばに恭仁宮の大極殿として移築され、山城国分寺金堂として転用されている。恭仁宮大極殿での発掘調査は全面的なものではないが、柱位置の想定は可能でそれを第一次大極殿跡に援用した。
- 7 『隋書』志第五礼儀五にみると、「車之蓋圓、以象天、輿方、以象地。輪輻三十、以象日月。蓋椽二十有八、以象列宿。」とあり（『隋書』一、紀志、中華書局、p.199）、馬車の形も天円地方という古代中国の宇宙観を表すのであり、『周礼』考工記以来の伝統である。車については次が参考になる。高田克巳「周礼と考工記について - 「規矩」の発達過程の研究 (1) -」『日本建築學會研究報告』No.46、1959年、pp. 366-369。同「規矩考 - 「周礼」考工記よりの考察 (続) -」『大手前女子大学論集』vol.4、大手前女子大学、1970年、pp.194-222。大橋正次『中国星座の歴史』雄山閣出版、1988年、pp.250-251。
- 8 中島千秋『文選（賦篇）上』新釈漢文体系第79巻、明治書院、2000年、pp.25-39。
- 9 中島千秋『文選（賦篇）上』（前掲註8文献）、pp.87-90。

- 10 高橋忠彦『文選（賦篇）下』新釈漢文体系第81巻、明治書院、2001年、pp.1-3。
- 11 吉田 歆『日中宮城の比較研究』吉川弘文館、2002年、pp.44-48。
- 12 森鹿三・日比野丈夫他訳「水経注（抄）」『洛陽伽藍記 水経注（抄）』中国古典文学大系第21巻、平凡社、1977年、p.314。
- 13 渡辺信一郎「宮闕と園林」『考古学研究』第47巻第2号、考古学研究会、2000年、pp.12-28。
- 14 王 維坤『日中の古代都城と文物交流の研究』朋友書店、1997年、p.86。
- 15 瀧川政次郎『京制並びに都城制の研究』法制史論叢第2冊、角川書店、1965年、pp.305-351。
- 16 于 倬云『中国宮殿建築論文集』紫禁城出版社、2002年、p.150。
- 17 早川庄八『天皇と古代国家』講談社学術文庫、講談社、2000年、pp.221-222。串田久治『儒教の智慧』中公新書、中央公論社、2003年、pp.172-175。東野治之「飛鳥奈良朝の祥瑞災異思想」『日本歴史』第259号、吉川弘文館、1969年、pp.49-60。関 晃「律令国家と天命思想」『日本古代の国家と社会』吉川弘文館、1997年、pp.140-164。
- 18 程 萬里主編「数理設計」『中国伝統建築』中国建築工業出版社、1991年、pp.18-24。
- 19 徳と刑について補足をする、董仲舒『春秋繁露』陰陽義に「陽は徳なり、陰は刑なり」とあり、巻十四の四時には「四時は陰陽の大径なり、刑徳は四時の合なり、刑徳、時に合すれば即ち福を生じ、詭うきときは則ち禍を生ず」とある。刑は陰を象徴するものであり、四時の循環を促す要因と考えられていた（土居淑子『古代中国の画像石』同朋社出版、1986年、p.175）。徳政の一つが恩赦と認識されており（佐竹 昭『古代王権と恩赦』雄山閣出版、1998年）、しばしば古代の天皇が大赦を施すのはこのためである。
- 20 平勢隆郎「数の秩序と九・六・八」『考古学ジャーナル』500号、ニュー・サイエンス社、2003年、pp.6-11。
- 21 細井浩志「奈良時代の暦算教育制度－陰陽寮暦科・大学寮算科の変遷と得業生－」『日本歴史』第677号、吉川弘文館、2004年、pp.1-16。
- 22 馬場理恵子「「術数」概念の成立と漢代学術」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』史編第三号、2004年、pp.1-33。
- 23 渡辺信一郎「六朝隋唐期の太極殿とその構造」奈良女子大学COE《都城制研究集会第1回》宮中樞部の形成と展開－太極殿の成立をめぐる－レジュメ、2007年3月24日。
- 24 『舊唐書』三、紀志、中華書局、pp.857-862。
- 25 秋山日出雄「平城宮造営規格の成立」『日本政治社会史研究』上、塙書房、1984年、pp.371-404。
- 26 小南一郎『古代中国 天命と青銅器』京都大学学術出版会、2006年、p.50-52。
- 27 『天壇』中国旅遊出版社、1993年、pp.31。
- 28 韓国文化財廳『勤政殿実測調査報告書』上（2000年）によると、柱に配当する場合と柱間に配当する場合があるようである。日本語訳では芮京祿氏の協力を得た。記して謝したい。
- 29 米田美代治『朝鮮上代建築の研究』秋田屋、1944年、p.133。
- 30 一然著・金思燁訳『完訳三国遺事』明石書店、1997年、p.219、p.225。
- 31 金富軾著・金思燁訳『完訳三国史記』明石書店、1997年、p.220。
- 32 佐川英治「北魏の平城」『アジア遊学』No.78、勉誠出版、2005年、pp.54-68。吉田 歆『日中宮城の比較研究』（前掲註11文献）、p.68。
- 33 韓国文化財廳『勤政殿実測調査報告書』上（前掲註28文献）、pp.127-128。
- 34 『中国文化叢書2 思想概論』大修館書店、1973年、pp.60-61。
- 35 武井 一『ソウルの王宮めぐり』桐書房、2000年、p.169。
- 36 『三輔黄図校注』三秦出版社、1995年。『三輔黄図』は著者は漢代の人と称するが、魏晉以降の内容

- も含まれるため南北朝時代の作とされ、唐宋時代にも増補し注が付け加えられている（「中国都市史研究の史料と方法」大阪市立大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム都市文化創造のための比較史的研究、2005年、p.21）。
- 37 奈良文化財研究所「大極殿院の調査－第117次」『奈良文化財研究所紀要2003』奈良文化財研究所、2003年、pp.78-84。
 - 38 新川登亀男『日本古代の儀礼と表現』吉川弘文館、1999年、p.163。
 - 39 渡辺晃宏「平城宮中枢部の構造—その変遷と史的位置—」『古代中世の政治と権力』吉川弘文館、2006年、pp.122-149。
 - 40 『後漢書』十一、志(一)、中華書局、p.3216。
 - 41 『晋書』二、志、中華書局、p.291。
 - 42 大崎正次『中国の星座の歴史』雄山閣出版、1988年、pp.252-253。清・徐松『唐兩京城坊攷』卷5「宮城」に、「宮城在皇城北。因隋名日紫微城。」「皇城傳宮城南。因隋名日太微城。」とある。
 - 43 吉野裕子『大嘗祭 天皇即位式の構造』弘文堂、1990年、pp.37-57。
 - 44 直木孝次郎『神話と歴史』吉川弘文館、2006年、p.208。
 - 45 前掲註40文献、p.332。
 - 46 前掲註40文献、p.289。
 - 47 宮本長二郎ほか「遺構」『平城宮跡発掘調査報告 XI 第一次大極殿院の調査』（前掲註1文献）、p.78。
 - 48 中島千秋『文選(賦篇)上』（前掲註8文献）、pp.44-45。
 - 49 小南一郎「七夕儀の礼と物語り－水の機能の両義性を中心にして－」『別府大学アジア歴史文化研究所報』第16号、別府大学アジア歴史文化研究所、1998年、pp.1-19。なお、中国南部の広東あたりに遺る民俗例では、七夕の日の天の河の水が直接地上の水に繋がると考えられているが、少し北の江南地方では露を介して天と地が結びついているという。
 - 50 坂本勝『古事記の読み方－八百万の神の物語－』岩波新書、岩波書店、2003年、pp.6-10。
 - 51 直木孝次郎『日本神話と古代国家』講談社、1990年、p.30。
 - 52 「日の中に三足の鳥あり」と記述されたのは前漢末の緯書（古いや予言を記した書）である『春秋元命包』である。これより以前の前漢の文帝の時代の記録に「日の中に王の字あり」とある。また、『淮南子』精神訓には「日の中に陵鳥あり」とあり、いずれも太陽の中の黒点を示していると考えられている（橋本敬造『中国占星術の世界』東方書店、1999年、pp.47、pp.28-35）。
 - 53 宮本長二郎ほか「遺構」『平城宮跡発掘調査報告 XI 第一次大極殿院の調査』（前掲註1文献）、p.82。
 - 54 奈良国立文化財研究所「第一次大極殿院地区の調査－第295次・第296次」『奈良国立文化財研究所年報』1999-Ⅲ、1999年、p.11。
 - 55 渡辺信一郎「六朝隋唐期の太極殿とその構造」（前掲註23文献）。
 - 56 『瀋陽故宮』瀋陽出版社、2005年、p.33。
 - 57 前掲註38文献、pp.128-176。
 - 58 前掲註38文献、p.148。
 - 59 猪熊兼勝「朱雀とともに眠る古墳の被葬者像」『明日香風』第80号、飛鳥保存財団、2001年、pp.21-25。
 - 60 小島 毅『東アジアの儒教と礼』山川出版社、2004年、p.49。
 - 61 金子修一『古代中国と皇帝祭祀』汲古書院、2001年、p.84。
 - 62 高橋忠彦『文選(賦篇)中』新釈漢文体系第80巻、明治書院、2004年、pp.9-10。

- 63 北斗七星と宮殿等との関係は次のことが指摘できる。① 幕末の天皇が即位式で用いた^{こうべん}袞冕十二章と呼ぶ礼服の背中に北斗七星が描かれること。② 塼積壇と斜路の要所に点を補って考えるとその折れ曲がる形が北斗七星の形態に似ること。③ 刀身に北斗七星を刻みその靈力を込めたを劍を七星劍と呼ぶ。日本では正倉院御物の呉竹鞘杖刀、四天王寺伝来の聖徳太子御所佩の劍、法隆寺伝来の七星劍が現存し、北斗七星が尊ばれていたことが知られる。④ 呉竹鞘杖刀は両面の文様が合わさるようにできており、その刃を大極殿を貫く南北の軸線に見立て両面を展開すると、西側斜路は裏北斗となり、儀礼の行われる朱雀大路をはじめとする宮都の中軸線が北斗七星の靈力を持つことになる。⑤ 北斗七星は大嘗祭の儀式や伊勢神宮とも祭祀とも密接とする指摘もある。⑥ 平安時代の元日四方拝では、『内裏儀式』や『西宮記』、『江家次第』などに北斗七星が登場する。⑦ 前期難波宮の朝堂院が十四堂だとすると、その建物配置は北斗と裏北斗を象ることになる。これは想像が過ぎようか。
- 64 十七条憲法に、「三に曰く、詔を承りては必ず謹め、君をば天とす、臣をば地とす。天覆い、地載せて、四の時順り行き、万気通ずるを得るなり。地天を覆わんと欲せば、則ち壊るることを致さんのみ。」とあるように、9:6で示される地割りが表現したものは君天臣地という儒教的秩序と思われる。『管子』五行篇に「天道は九を以て制し、地理は八を以て制す」とあることなどから、十七条憲法の17は陽の極数9と、陰の数8の和と考えられがちであるが、『易』においては陰の極数は6である。吉野裕子『易と日本の祭祀』（人文書院、1999年、pp.64-74）が詳しい。『五行大義』「数を論ず」（中村璋八・清水浩子『五行大義』上、新編漢文選8 思想・歴史シリーズ、明治書院、1998年、pp.88-91）でも説明されている。
- 65 中村璋八・古藤友子『五行大義 上』新編漢文選7、明治書院、1998年、p.89。
- 66 岡本東三「瓦磚」『平城宮跡発掘調査報告 XI 第一次大極殿院の調査』（前掲註1文献）、p.129。なお、『年中行事絵巻』の平安宮大極殿の図にその前庭の龍尾壇とその上部に高欄が描かれていることから、この出土遺物は高欄の柱底部の安定のために用いられた可能性もあるが、部材の厚さが少ないように思われる。また、類似品は大極殿から離れた平城宮内の基幹排水路で内裏東外郭を流れる東大溝や長屋王邸でも出土していることを付記しておく。
- 67 ただし、時代と場所の離れた両者の文化的関連については今後の課題としておきたい。なお、日暈そのものに良い意味はなく、日暈に白虹が貫くようにみえる見えた時は君主に武器が向く予兆とされる（青木和夫他校注『続日本紀』二、新日本古典文学大系13、岩波書店、1996年、p.88）。「日暈文」というのは近代日本の学者の命名だろうか。
- 68 青木和夫・小林芳規他校注『古事記』日本思想体系1、岩波書店、1988年、p.15。
- 69 水口幹記は「祥瑞品目のランク分類された治部省式は大宝令施行当初はまだ存在しなかったが、慶雲期遅くとも和銅期には治部省に備えられていた」と指摘しているという（水口幹記「延喜治部省式祥瑞条の成立過程」『史観』第137冊、早稲田大学史学会、1997年、pp.51-65）。氏の指摘する通り、それを『古事記』完成の和銅五年正月以降、あるいは第一次大極殿院完成後に初めて行われた朝賀とみられる和銅七年正月以降の和銅年間とすれば、それまで祥瑞と考えられていた“暉”が、治部省式で脱落した可能性も考えられ、その祥瑞観は前時代からの意識を引き継いだ太陽観に基づくものだったの可能性が指摘できるのではなかろうか。
- 70 大室幹雄『劇場都市』三省堂、1986年。
- 71 中嶋洋典『五色と五行』世界聖典刊行協会、1986年、pp.126-135。
- 72 和同開珎の開の字に使われる“井”の字について。この字と〇〇通宝に使われる“通”の字は、上記の文脈から井が天に通じる意味で解釈できると思われる。なお、富本銭や和同開珎の銭文についての解釈は、松村恵司「古代銭貨の銭文」（『文字と古代日本』4 神仏と文字、吉川弘文館、2005

年)が詳しい。

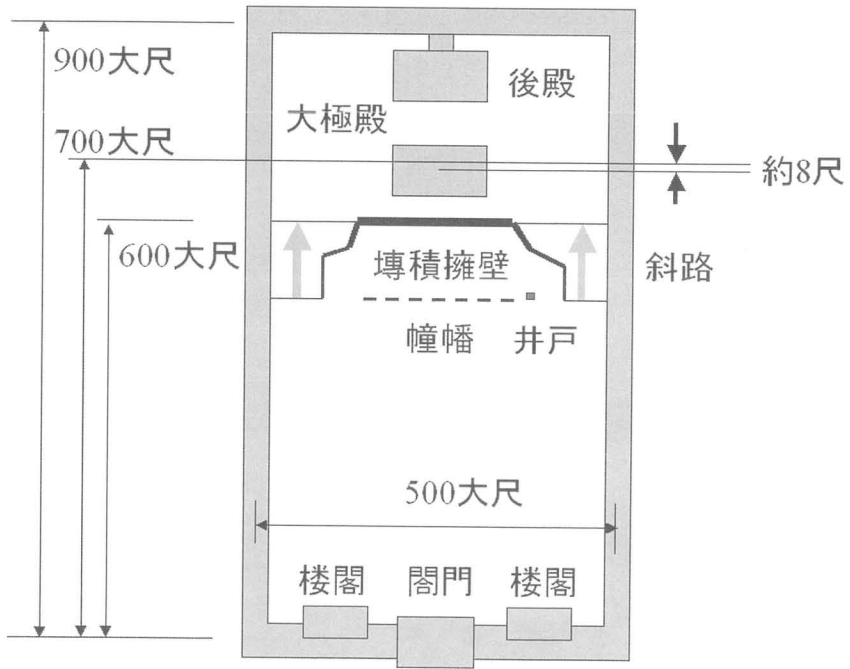
- 73 奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告 XI 第一次大極殿院の調査』(前掲註1文献)、p.236。
- 74 青木和夫他校注『続日本紀』二(前掲註67文献)、p.401。
- 75 上野邦一・浅川滋男「建築遺構の復原」『平城宮発掘調査報告 XIV 第二次大極殿院の調査』(前掲註4文献)、pp.179-180。
- 76 小澤 毅『日本古代宮都構造の研究』青木書店、2003年、pp.347-349。
- 77 楊銜之撰・入矢義高訳『洛陽伽藍記』『洛陽伽藍記・水経注(抄)』中国古典文学大系第21巻、平凡社、1977年、p.7。
- 78 山田宏・窪寺茂・清水重敦「古代建築の大棟中央飾りー平城宮大極殿の復原研究ー」『奈良文化財研究所紀要2006』奈良文化財研究所、2006年、p.20-21。
- 79 林巳奈夫『漢代の神神』臨川書店、1989年、pp.219-280。
- 80 清野孝之「大極殿院の屋根の色」『奈良文化財研究所紀要2004』奈良文化財研究所、2004年、p.33。
- 81 佐川正敏「中国の軒平瓦の成形・施文技法を考えるー東アジアの造瓦技術の比較研究 Iー」『日本中国考古学会会報』第二号、日本中国考古学会、1992年、pp.1-13。
- 82 吉野裕子『大嘗祭 天皇即位式の構造』弘文堂、1990年、pp.168-172。同『易と日本の祭祀』弘文堂、1984年、pp.133-135。
- 83 松村恵司「古代銭貨の銭文」(前掲註72文献)、pp.78-103。
- 84 櫻井久之「重圏文軒瓦の意匠について」『続文化財学論集』続文化財学論集刊行会、2003年、pp.225-234。
- 85 橋本敬造『中国占星術の世界』東方書店、1999年、pp.28-35。
- 86 前掲註85文献 pp.35-38。
- 87 詳しくは、三宅久雄「青斑石龜合子と仙薬七星散」(『正倉院紀要』第23号、宮内庁正倉院事務所、2001年)。
- 88 班固著・小竹武夫訳『漢書』2、表・志上、ちくま学芸文庫、筑摩書房、1998年、pp.218-219。
- 89 渡辺晃宏「平城宮中枢部の構造ーその変遷と史的位置ー」『古代中世の政治と権力』吉川弘文館、2006年、pp.122-149。
- 90 岩永省三「大嘗宮移動論ー幻想の氏族合議制ー」『九州大学総合研究博物館研究報告』第4号、九州大学総合研究博物館、2006年、pp.99-132。
- 91 宇治谷孟『続日本紀』(中)全現代語訳、講談社学術文庫、講談社、2003年、p.170。
- 92 林部 均「古代宮都と天命思想 飛鳥浄御原宮における大極殿の成立をめぐる」『律令制国家と古代社会』塙書房、2004年、pp.83-104。
- 93 『礼記』礼器第十には、「天子之堂九尺」とある。
- 94 江口 洸『古代天皇と陰陽寮の思想 持統天皇歌の解説より』河出書房新社、1999年。江口氏は十九について次のように指摘している。『日本書紀』に散見できるが、天皇在位年数では、初代神武天皇が76年、三代安寧天皇38年、七代孝靈天皇76年、八代孝元天皇57年となっており、19年の倍数が使われている。そして、690年一月一日に即位した持統天皇の1349 (=19年×71)年前の前660年の一月一日に神武天皇が即位したことになっている。また、伊勢神宮の式年遷宮は690年から785年までの間は一十九年ごとの遷宮が行われていた。さらに、孝徳天皇五年には十九階の冠位の数にも見られる。
- 95 今泉隆雄「漏刻制と陰陽寮」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告IV 飛鳥水落遺跡の調査』奈良国立文化財研究所学報第55冊、奈良国立文化財研究所、1995年、pp.123-140。

- 96 奈良文化財研究所「大極殿院の調査－第117次」(前掲註37文献)、p.82。
 97 岡田芳朗『日本の暦』新人物往来社、1996年、pp.72-73。
 98 細井浩志「奈良時代の暦算教育制度－陰陽寮暦科・大学寮算科の変遷と得業生－」『日本歴史』第677号、吉川弘文館、2004年、pp.1-16。
 99 박희용・김충기・최충철・홍대형「朝鮮時代 宮闕 正殿 唐家의 형식과 역할에 관한 연구」『大韓建築學會論文集』計劃系22 권1호、2006年、pp.167-174。タイトルの日本語訳は、「朝鮮時代宮闕正殿唐家の形式と役割に関する研究」。日本語訳では金年泉氏の協力を得た。記して謝したい。

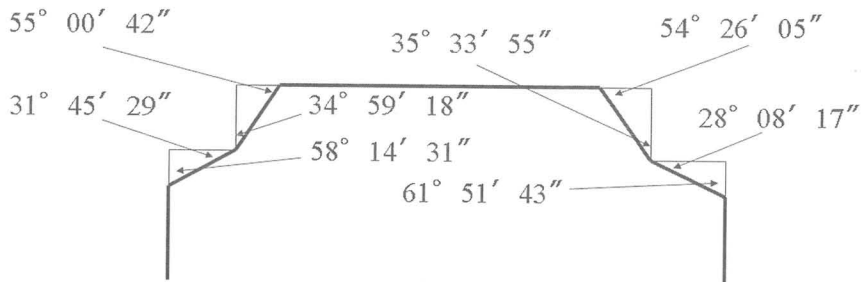
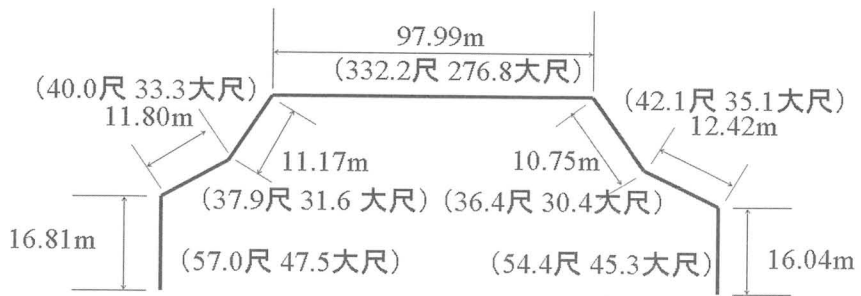
図表一覧

- 第1図 平城宮第一次大極殿院概略図
 第2図 塼積擁壁の長さと角度
 第3図 平城宮第一次大極殿院の遺構図と基点
 第4図 平城宮第一次大極殿院1:100模型(写真では井戸位置の模型の誤りを修正)
 第5図 塼積壇検出状況(西から)
 第6図 塼積壇(西から)
 第7図 塼積壇中央の木階(西から)
 第8図 塼積壇東端(E1)と東側斜路出隅(E2)(南東から)
 第9図 東側斜路入隅(E3)(南から)
 第10図 東側斜路(E3とE4の間)(西から)
 第11図 塼積壇西端(W1)(南東から)
 第12図 西側斜路出隅(W2)(東から)
 第13図 西側斜路起点(W4)(南から)
 第1表 平城宮第一次大極殿院遺構座標値および基点座標値
 第14図 基点配置図
 第2表 各基点から塼積擁壁各点までの距離
 第15図 設計案A
 第16図 設計案B
 第17図 藤原宮大極殿院における大極殿の配置
 第18図 難波宮大極殿院における大極殿の配置
 第19図 平城宮第二次大極殿院における大極殿の配置
 第20図 長岡宮大極殿院における大極殿の配置
 第21図 平城宮第二次大極殿院下層建物の配置
 第22図 第一次大極殿院の基準線と大極殿の柱配置
 第23図 孔廟の大成殿(ソウル)
 第24図 京都御所紫宸殿の高御座(『桂／修学院と京都御所』学習研究社、1979年、p.50)
 第25図 キトラ古墳石室天井の天文図(飛鳥資料館『キトラ古墳壁画四神玄武』飛鳥資料館図録第46冊、2007年、p.35)
 第26図 紫禁城太和門前の金水河
 第27図 月令図式の宇宙論(程万里主編「数理設計」(前掲註18文献)、p.18)
 第28図 天壇の祈念殿(北京)
 第29図 景福宮慶会楼(ソウル)
 第30図 新羅の瞻星台(慶州)

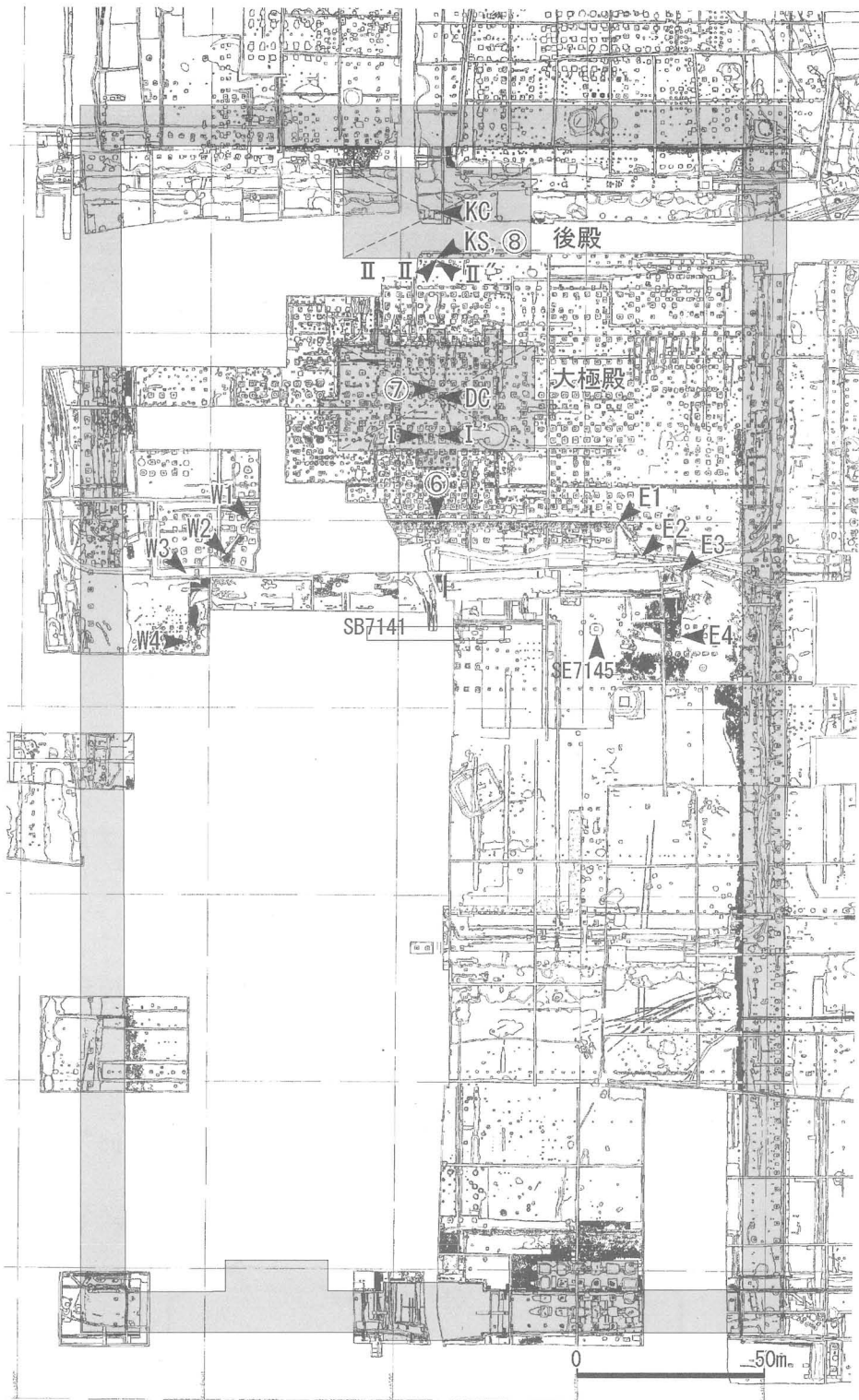
- 第31図 太極図と宮殿の配置図（武井一『ソウルの王宮めぐり』（前掲註35文献）、p.171）
- 第32図 キトラ古墳天文図の紫微宮と太微宮
- 第33図 紫微宮（橋本敬造『中国占星術の世界』（前掲註85文献）、p.95）
- 第34図 太微宮（橋本敬造『中国占星術の世界』（前掲註85文献）、p.99）
- 第35図 前期平城宮と伊勢神宮内宮
- 第36図 烏形幢模型（奈良文化財研究所『飛鳥・藤原京展』朝日新聞社、2002年、p.167）
- 第37図 幢 幡（奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 XIV 第二次大極殿院の調査』（前掲註4文献）、p.164）
- 第38図 大極殿と二列の幢幡遺構の位置関係
- 第39図 第一次大極殿院塼積壇前出土の塼状飾板
- 第40図 高麗時代の日暈文軒瓦
- 第41図 含元殿基壇の装飾（『大明宮含元殿パンフレット』ユネスコ）
- 第42図 大極殿院の八咫鳥
- 第43図 中国河北省宣化陵壁画墓天井壁画（河北省文物管理处・河北省博物館「遼代彩繪星図是我国天文史上的重要发现」『文物』1975年第8期、文物出版社、1975年、p.44）
- 第44図 藤原宮大極殿院出土軒瓦
- 第45図 七曜文と富本錢（松村恵司「古代錢貨の錢文」（前掲註72文献）、p.89）
- 第46図 大官大寺出土軒丸瓦（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部『藤原宮と京』1991年、p.95）
- 第47図 平城宮第一次大極殿院出土軒瓦
- 第48図 難波宮大極殿院出土軒瓦
- 第49図 蓋天説（橋本敬造『中国占星術の世界』（前掲註85文献）、p.30）
- 第50図 渾天説による太陽の運行（橋本敬造『中国占星術の世界』（前掲註85文献）、p.36）
- 第51図 月城出土の「在城」裏字瓦
- 第52図 難波宮大極殿院出土軒瓦のイメージと空間認識
- 第53図 平城宮第二次大極殿院出土軒瓦



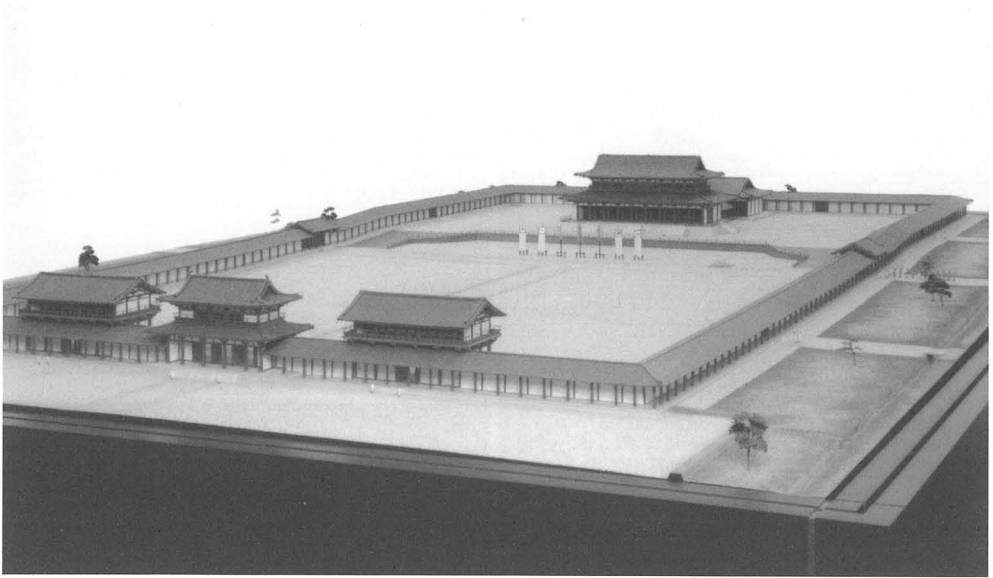
第1図 平城宮第一次大極殿院概略図



第2図 塙積擁壁の長さと角度



第3図 塙積擁壁の長さと角度



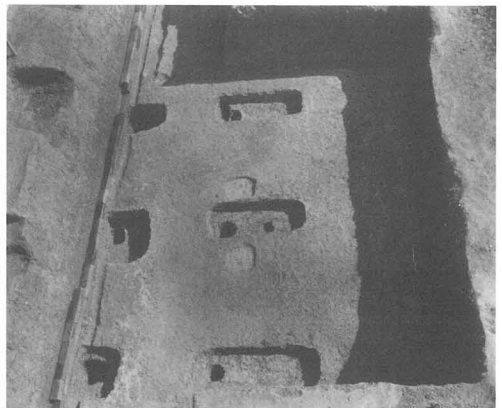
第4図 平城宮第一次大極殿院 1:100模型 (写真では井戸位置の模型の誤りを修正)



第5図 塙積壇検出状況 (西から)



第6図 塙積壇 (西から)



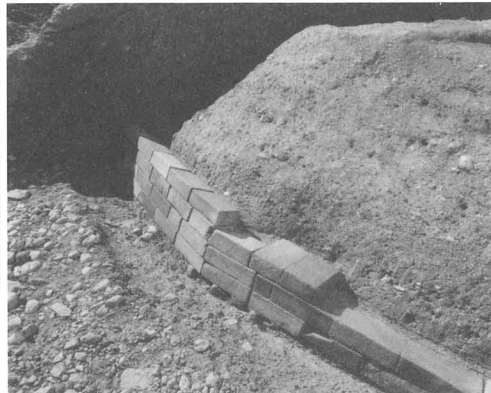
第7図 塙積壇中央の木階 (西から)



第8図 埴積壇東端 (E1) と東側斜路出隅 (E2) (南東から)



第11図 埴積壇西端 (W1) (南東から)



第12図 西側斜路出隅 (W2) (東から)



第9図 東側斜路入隅 (E3) (南から)



第10図 東側斜路 (E3とE4の間) (西から)

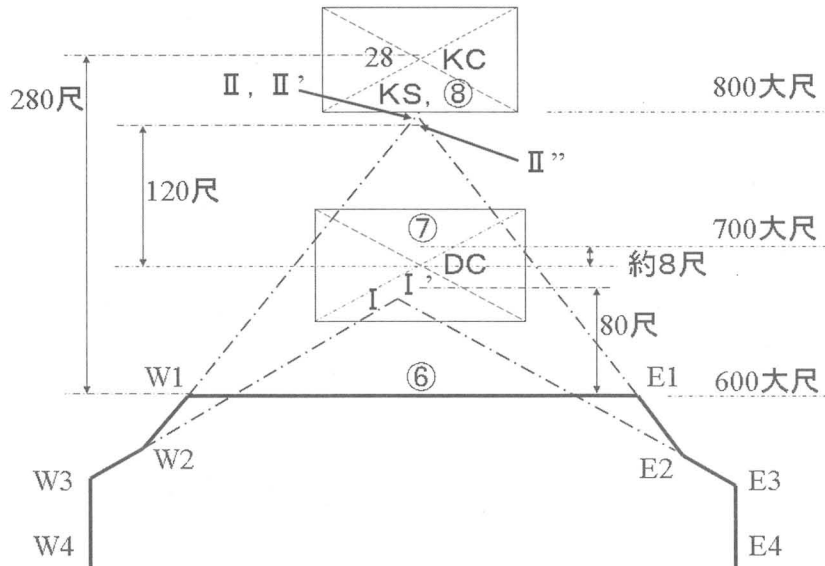


第13図 西側斜路起点 (W4) (南から)

第1表 平城宮第一次大極殿院遺構座標値および基点座標値

場 所	記号	X	Y	特記事項 (出典)
大極殿院回廊北東隅心		-145,143.66	-18,501.86	
塙積擁壁中点の280尺北	28	-145,167.60	-18,589.94	
後殿想定心	K C	-145,167.49	-18,589.94	
塙積擁壁中点の200大尺北 (800/900)	⑧	-145,179.40	-18,589.94	
後殿基壇南面想定中点	K S	-145,179.44	-18,589.94	
斜路出隅南辺延長部交点	II	-145,180.96	-18,590.53	
IIの近似点 (IIの0.49東、0.25南)	II'	-145,181.21	-18,590.04	
IIの近似点 (大極殿心の120尺北)	II''	-145,181.68	-18,589.94	
塙積擁壁中点の100大尺北 (700/900)	⑦	-145,214.80	-18,589.94	
高御座心	T	-145,214.79	-18,589.94	(身舎十北庇)の中心値
大極殿心	DC	-145,217.08	-18,589.94	奈文研年報2000-Ⅲ pp.24-27
大極殿基壇南面階段下推定中点	DSK	-145,235.83	-18,589.86	基壇南面心の15尺南
Iの近似点 (塙積擁壁中点の80尺北)	I'	-145,226.60	-18,589.94	
斜路出隅南辺延長部交点	I	-145,227.41	-18,593.73	
塙積壇中点 (600/900)	⑥	-145,250.20	-18,589.94	
塙積壇東端	E1	-145,250.16	-18,540.94	
塙積壇西端	W1	-145,250.24	-18,638.93	
東斜路出隅	E2	-145,258.90	-18,534.68	
西斜路出隅	W2	-145,259.40	-18,645.33	
東斜路入隅	E3	-145,264.75	-18,523.72	
西斜路入隅	W3	-145,265.62	-18,655.36	検出できず、想定値
東斜路起点	E4	-145,280.78	-18,524.17	南端はさらに南の可能性大
西斜路起点	W4	-145,282.43	-18,655.55	
北側幡竿列	BN 1	-145,278.50	-18,571.38	東から1つ目の柱穴心
北側幡竿列	BN 3	-145,278.55	-18,583.45	東から3つ目の柱穴心
南側幡竿列	BS 1	-145,282.05	-18,571.35	東から1つ目の柱穴心
南側幡竿列	BS 3	-145,282.10	-18,583.00	東から3つ目の柱穴心
井戸 S E 7145 SE		-145,278.90	-18,546.60	
大極殿院回廊南東隅心		-145,461.25	-18,500.47	
大極殿院回廊南西隅心		-145,141.80	-18,677.50	奈文研年報1999-Ⅲ p.18

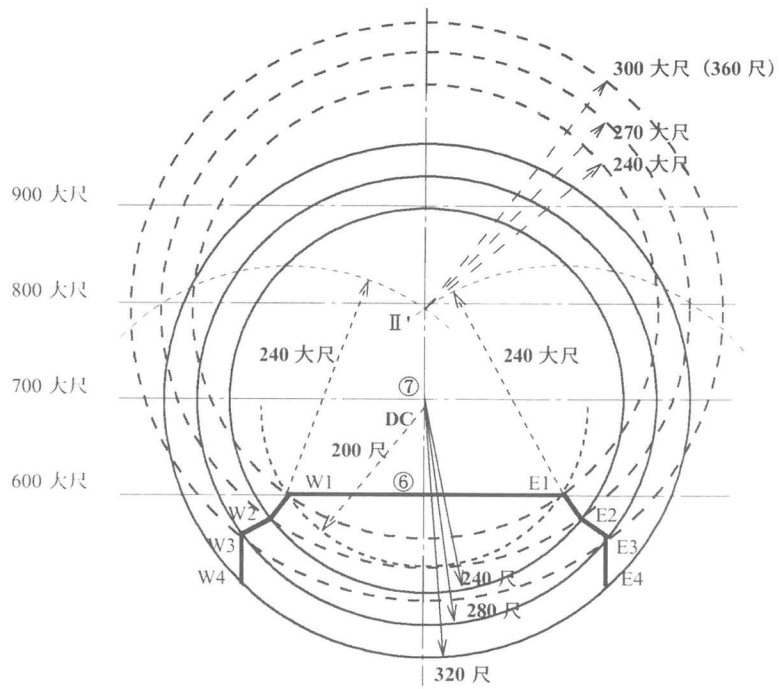
(数値は日本測地系)



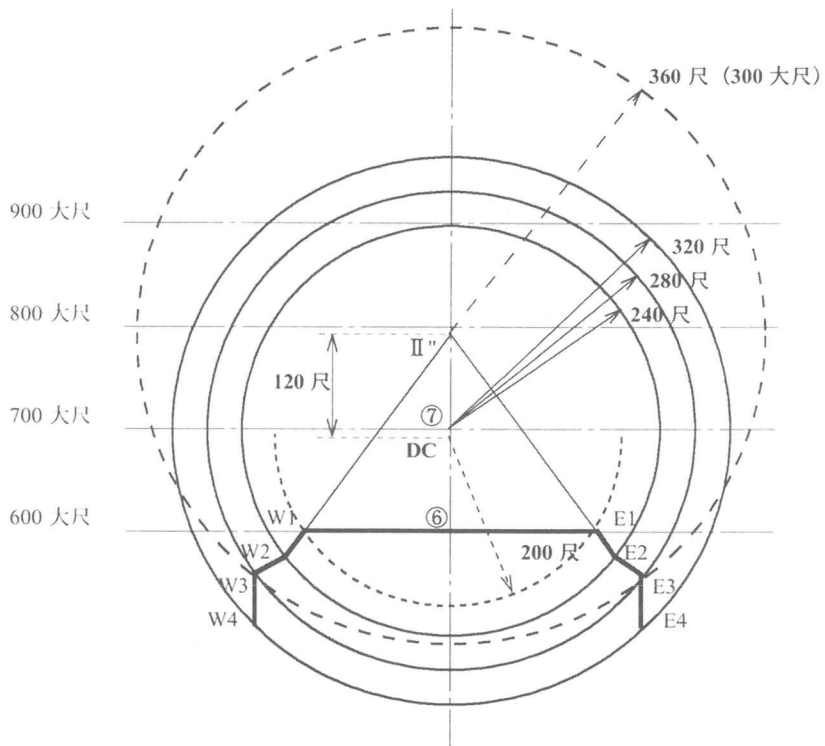
第14図 基点配置図

第2表 各基点から埴積擁壁各点までの距離

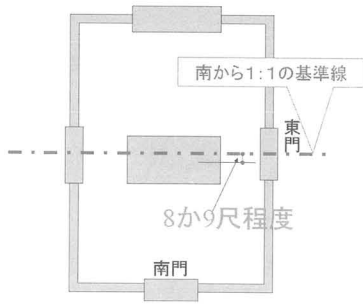
基点 (記号)	擁壁各点	距離 (m)	距離 (尺)	距離 (大尺)	計画値 尺	計画値 大尺	整数値 (×40尺)	整数値 (×30大尺)
埴積擁壁中点の280尺北 (28)	⑥	82.60	280.0	233.3			7	
	E1	96.01	325.5	271.2		270大尺		
	W1	96.07	325.7	271.4		270大尺		
	E2	106.72	361.8	301.5				
	W2	107.22	363.5	302.9				
	E3	117.57	398.5	332.1	400尺		10	
	W3	117.85	399.5	332.9	400尺		10	
	E4	130.90	443.7	369.8				
	W4	132.25	448.3	373.6	450尺			
	埴積擁壁中点の200大尺北 (⑧)	⑥	70.80	240.0	200.0			6
E1		86.07	291.8	243.1	290尺			
W1		86.13	292.0	243.3	290尺			
E2		96.82	328.2	273.5	330尺			
W2		97.30	329.8	274.9	330尺			
E3		108.03	366.2	305.2				
W3		108.23	366.9	305.7				
E4		120.85	409.7	341.4				
W4		122.15	414.1	345.1				
1-2延長部交点 (II)		⑥	69.24	234.7	195.6			
	E1	85.13	288.6	240.5		240大尺		8
	W1	84.52	286.5	238.8		240大尺		8
	E2	95.88	325.0	270.8		270大尺		9
	W2	95.69	324.4	270.3		270大尺		9
	E3	107.16	363.3	302.7				
	W3	106.64	361.5	301.2				
	E4	119.86	406.3	338.6		340大尺		
	W4	120.52	408.5	340.5	410尺	340大尺		
	交点IIの近似点 (II') (交点IIの0.49E 0.25S)	⑥	68.99	233.9	194.9			
E1		84.65	286.9	239.1		240大尺		8
W1		84.59	286.7	239.0		240大尺		8
E2		95.40	323.4	269.5		270大尺		9
W2		95.76	324.6	270.5		270大尺		9
E3		106.66	361.6	301.3	360尺	300大尺		10
W3		106.73	361.8	301.5	360尺	300大尺		10
E4		119.39	404.7	337.3				
W4		120.57	408.7	340.6	410尺	340大尺		
大極殿心の120尺北 (II'')		⑥	68.57	232.4	193.7			
	E1	84.21	285.5	237.9				
	W1	84.26	285.6	238.0				
	E2	94.96	321.9	268.2				
	W2	95.44	323.5	269.6				
	E3	106.23	360.1	300.1	360尺	300大尺	9	10
	W3	106.42	360.7	300.6	360尺	300大尺	9	10
	E4	118.94	403.2	336.0				
	W4	120.23	407.6	339.6		340大尺		
	埴積擁壁中点の100大尺北 (⑦) 高御座心	⑥	35.40	120.0	100.0			3
E1		60.43	204.8	170.7		170大尺		
W1		60.46	204.9	170.8		170大尺		
E2		70.70	239.7	199.7	240尺	200大尺	6	
W2		71.11	241.1	200.9	240尺	200大尺	6	
E3		82.95	281.2	234.3	280尺		7	
W3		82.84	280.8	234.0	280尺		7	
E4		93.16	315.8	263.2				
W4		94.23	319.4	266.2	320尺		8	
大極殿心 (DC)		⑥	33.12	112.3	93.6			
	E1	59.12	200.4	167.0	200尺		5	
	W1	59.16	200.5	167.1	200尺		5	
	E2	69.30	234.9	195.8				
	W2	69.71	236.3	196.9				
	E3	81.59	276.6	230.5		230大尺		
	W3	81.43	276.0	230.0		230大尺		
	E4	91.56	310.4	258.6		260大尺		
	W4	92.60	313.9	261.6		260大尺		
	(I)の近似点 ⑥の80尺北 (I')	⑥	23.60	80.0	66.7			2
E1		54.37	184.3	153.6				
W1		54.40	184.4	153.7				
E2		64.01	217.0	180.8				
W2		64.37	218.2	181.8				
E3		76.42	259.1	215.9	260尺			
W3		76.17	258.2	215.2	260尺			
E4		85.21	288.8	240.7	290尺			
W4		86.15	292.0	243.4	290尺			
2-3延長部交点 (I)		⑥	23.10	78.3	65.3			
	E1	57.48	194.8	162.4				
	W1	50.65	171.7	143.1				
	E2	66.92	226.8	189.0				
	W2	60.72	205.8	171.5				
	E3	79.34	268.9	224.1				
	W3	72.52	245.8	204.9				
	E4	87.67	297.2	247.7				
	W4	82.77	280.6	233.8				



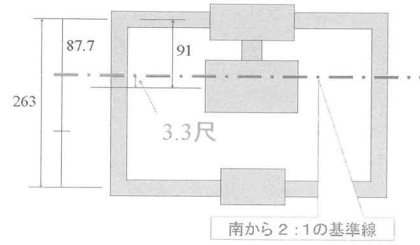
第15図 設計案A



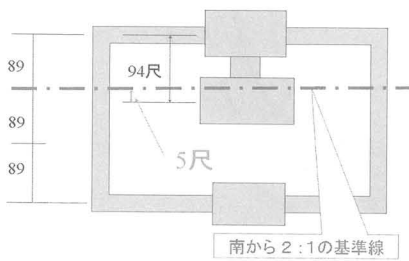
第16図 設計案B



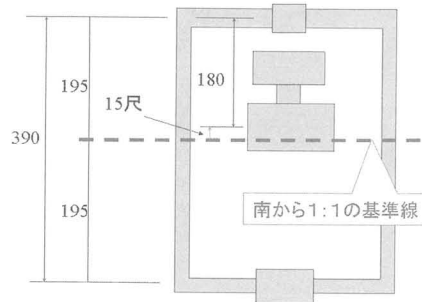
第17図 藤原宮大極殿院における大極殿の配置



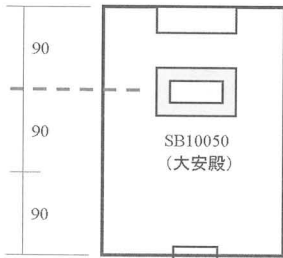
第18図 難波宮大極殿院における大極殿の配置



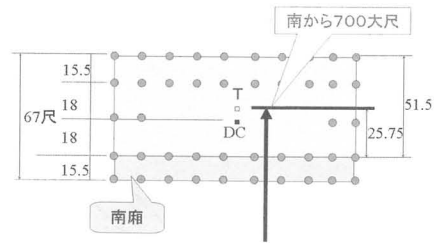
第19図 平城宮第二次大極殿院における大極殿の配置



第20図 長岡宮大極殿院における大極殿の配置



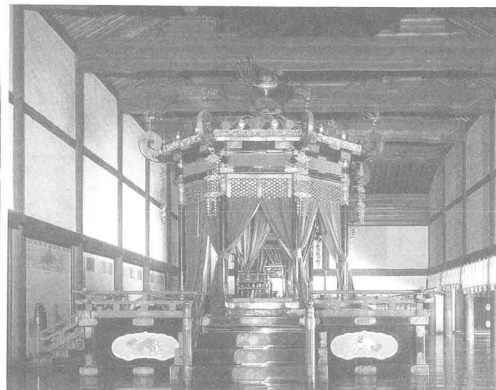
第21図 平城宮第二次大極殿院下層建物の配置



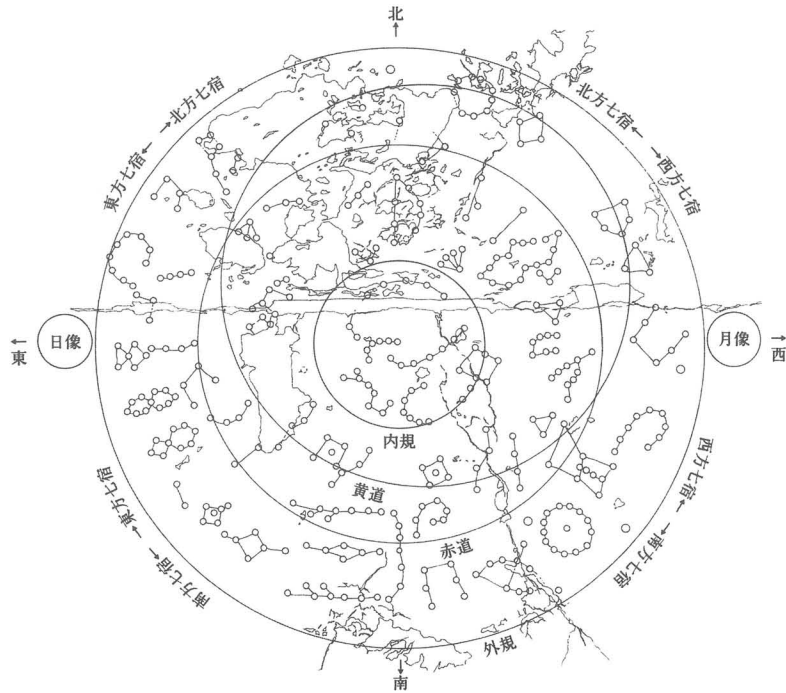
第22図 第一次大極殿院の基準線と大極殿の柱配置



第23図 孔廟の大成殿 (ソウル)



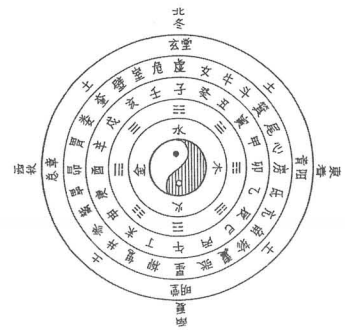
第24図 京都御所紫宸殿の高御座



第25図 キトラ古墳石室天井の天文図



第26図 紫禁城太和門前の金水河



第27図 月令図式の宇宙論



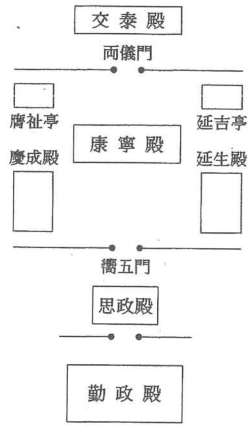
第28図 天壇の祈念殿 (北京)



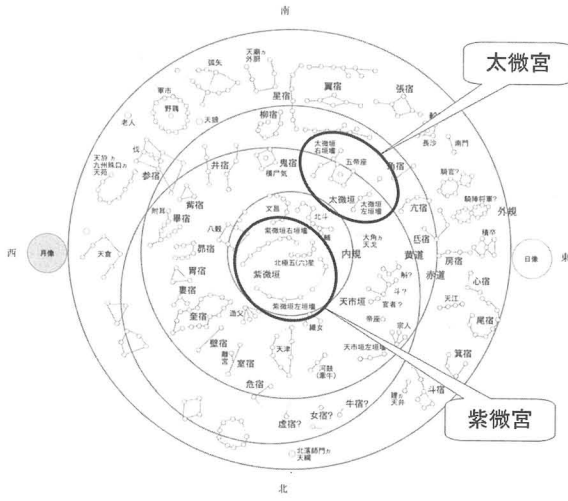
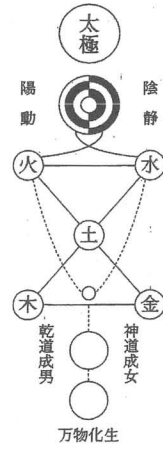
第29図 景福宮慶會樓 (ソウル)



第30図 新羅の瞻星台（慶州）



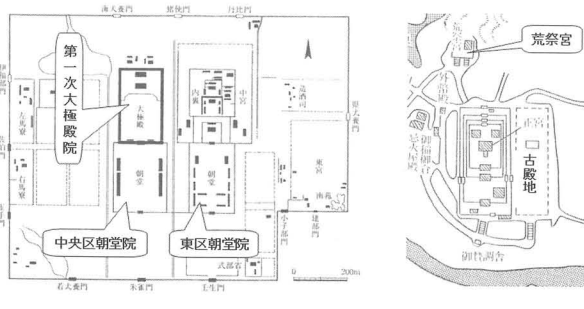
第31図 太極図と宮殿の配置図



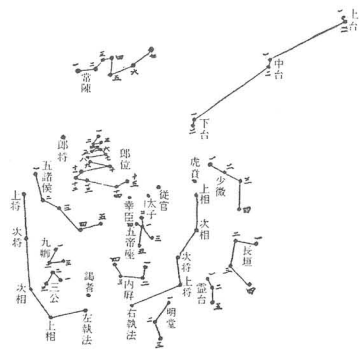
第32図 キトラ古墳天文図の紫微宮と太微宮



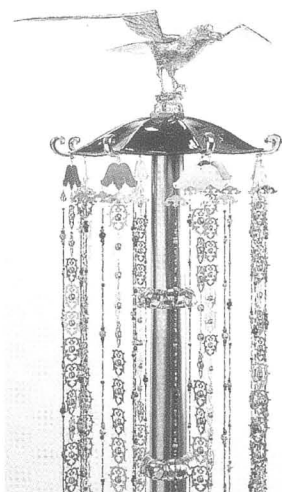
第33図 紫微宮



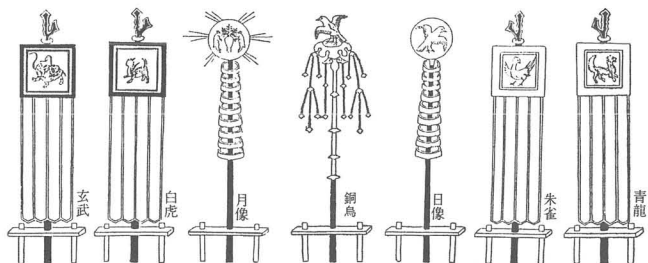
第35図 前期平城宮と伊勢神宮内宮



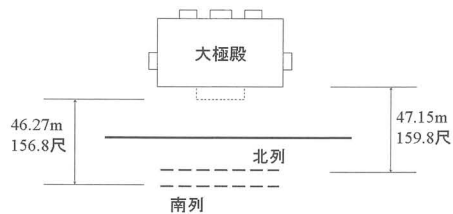
第34図 太微宮



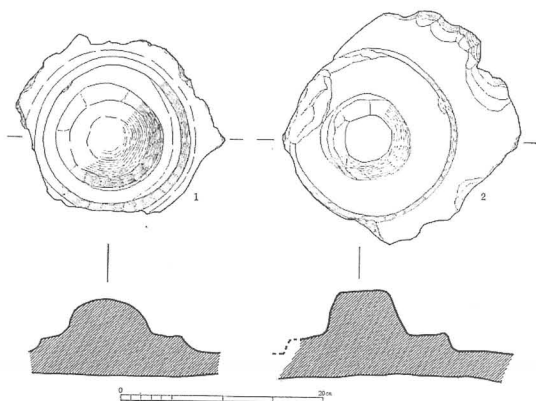
第36図 烏形幢模型



第37図 幢幡



第38図 大極殿と二列の幢幡遺構の位置関係



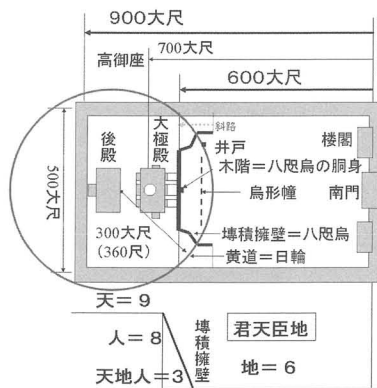
第39図 第一次大極殿院埴積壇前出土の埴状飾板



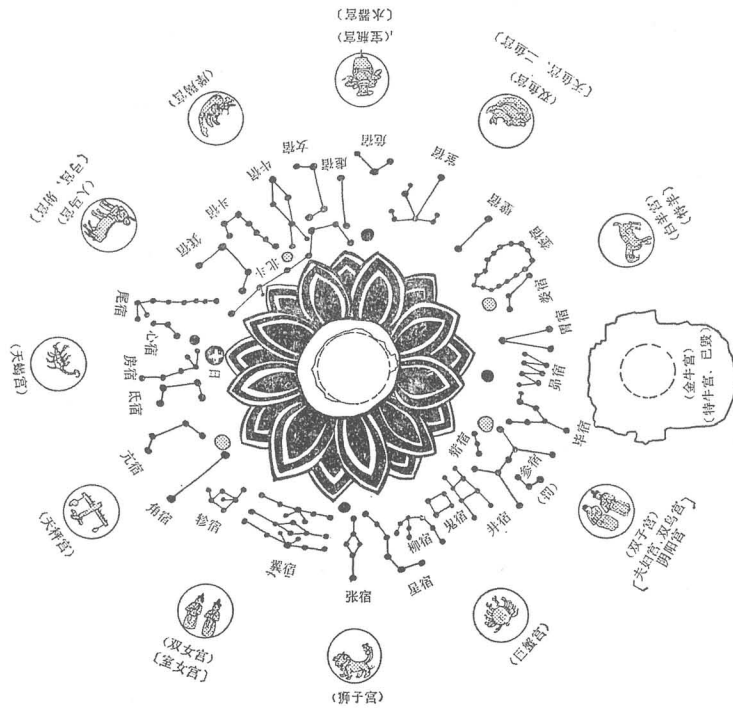
第40図 高麗時代の日量文軒瓦



第41図 含元殿基壇の裝飾



第42図 大極殿院の八咫鳥



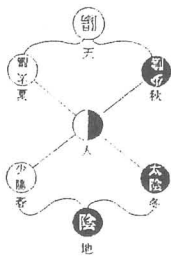
第43图 中国河北省宣化陵壁画墓天井壁画



第44图 藤原宮大極殿院出土軒瓦



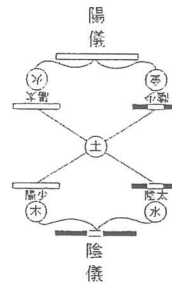
第46图 大官大寺出土軒瓦



圖之始七



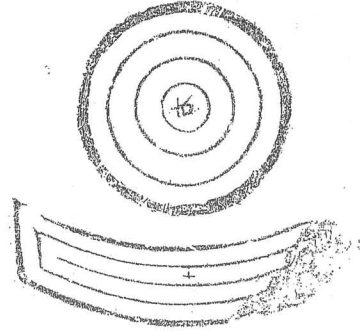
第45图 七曜文と富本錢



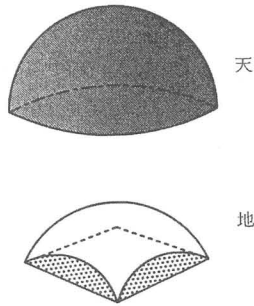
列成坤乾



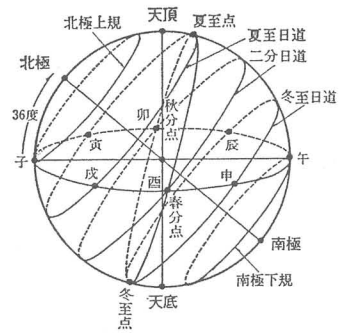
第47図 平城宮第一次大極殿院出土軒瓦



第48図 難波宮大極殿院出土軒瓦



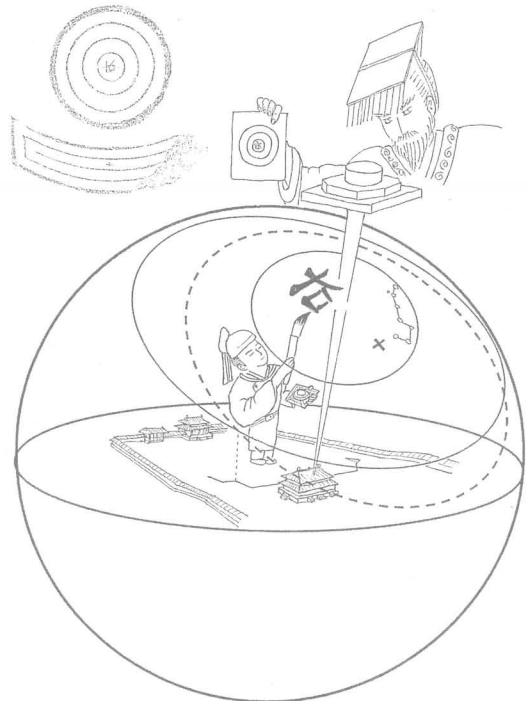
第49図 蓋天説



第50図 渾天説による太陽の運行



第51図 月城出土の「在城」裏字瓦



第52図 難波宮大極殿院出土軒瓦のイメージと空間認識



第53図 平城宮第二次大極殿院出土軒瓦

韓日 궁전의 설계사상에 관하여

内田和伸 (우찌다 가즈노부)

요 지 平城宮 제1차 大極殿院은 平城宮의 중심부에 위치하고, 즉위식과 정월 초하루의 朝賀(조우가) 등이 행해진 곳이다. 장대한 회랑이 大極殿을 둘러싸고 있고, 大極殿의 북쪽1/3은 약 2.4m의 高臺로, 남쪽 2/3은 잔돌이 깔린 광장이다. 高臺에는 大極殿·後殿이 위치하고, 광장에서 高臺로 오르는 경사로가 동서에 있으며, 高臺의 정면과 경사로의 측면에는 70도의 각도로 전(塼)쌓고 있다. 이 부분을 전적(塼積) 옹벽으로 부르고 있다. 그 형태와 각 부분의 길이는 이해하기가 어려우나, 설계방법을 검토한 결과, 大極殿 중심의 조금 북쪽에 치우친 중심을 가진 同心三圓과, 後殿 앞에 중심을 가진 일편심원의 교점 등을 이용하여 설계·시공하고 있는 것을 알게되었다. 이 同心三圓과 일편심원은 키토라(キトラ) 고분의 천문 그림과 같은 우주의 구조를 의도하고 있다. 시황제 이후, 궁전은 우주를 상징하는 것이었으며, 『文選』 등에 그 설계사상을 엿볼수 있다. 고대 일본도 이것을 배워, 신라도 아마 똑같이, 현존하는 경복궁에 계승되고 있다. 大極殿院에서의 유구·유물 해석의 시도와, 이후 발전될 한국에서의 유구·유물의 해석에, 비교 검토의 재료로서 제시할수 있다면 다행이라고 생각한다.

키워드 : 平城宮, 大極殿, 제1차 大極殿院, 전적(塼積) 옹벽, 경복궁, 설계사상

Design Concept of the Imperial Palaces in Korea and Japan

Uchida Kazunobu

Abstract : The former great audience hall compound (第一次大極殿院) was located in the center of the Nara imperial palace (平城宮). This was the special area for imperial ritual such as coronation ceremony and new-year morning ceremony. The great audience hall (大極殿) was surrounded by long corridors. The northern third part of the area was upraised for about 2.4 meter, and the southern two thirds part of the area was open space paved by pebbles. The great audience hall and the backward hall (後殿) were located on the upraised area. Two access ramps from the open space were situated at both sides of the upraised area. The upraised area and the ramps were retained by brick wall inclined at a 70 degree angle. The plan of the retaining brick wall was strange and intriguing since this was partly polygonal shape. The analysis of the design reveals that this was planned according to the intersecting points of three concentric circles that were centered at the northern part of the great audience hall and one eccentric circle that was centered in front of the backward hall. The three concentric circles and one eccentric circle represent the structure of the cosmos, like the constellations at the Kitora tomb. Imperial palaces had been designed to represent the universe since the Shi Huangdi (始皇帝) era, and the design concept was accounted in the text of Wen Xuan (文選). It is likely that the design concept was introduced to ancient Japan and Silla, and we can also observe it in the existing architecture of the Kyongbok imperial palace (景福宮). The study of the great audience hall compound in the Nara imperial palace may have some implications for understanding the Korean imperial palace sites.

Keywords : the Nara imperial palace, the greater audience hall (大極殿), the former great audience hall compound (第一次大極殿院), retaining brick wall, the Kyongbok palace (景福宮), design concept